

今からは決してかういふことを仰るな。中將様のお立派なお心に對しても恥かしい次第でもあるしお氣の毒でもある。右大臣様の姫君を奥方にして、其お方から澤山頂戴物をしようといふのですか。其麼にしなくても私どもがついて居るからには貴女一人位は怎麼にでもお世話しますよ。さういふ慾の深い心を持つてゐる人は特別罪の深いものです。又と再仰つたら私はお母さんの罪滅しの爲に坊主になりますぞ。本當にお可愛いさうに。人の戀中を裂くといふのは非常に悪いことです。」

といふと、乳母は

「返事もさせないでよく立て續けに言ひますね。誰が今直にあの奥様を捨て、おしまいなさいと言ひましたか。」

「右大臣の姫君と御夫婦にするのは結局さうではありませんか。」

「あゝやかましい。右大臣の方の話は口に出しても悪いのですか。汝は何だつてさう大袈裟に言ふのです。一つは自分の妻さんが大事だからでせう。」

と可愛さうとは思ひながらやり込める積りでいふと、帶刀は笑つて、

「よし、矢張お勧め申す氣ですな。それぢやどうしても私は坊主にならう。さうい

ふ罪を犯しなざるなら、屹度今に大きな報いが来るに違ひありません。お可愛さうです。

子として親の身の上を心配しない譯には参りませんからね。」

と剃刀を腋の下に挟んで持つた。

「今度此ことを言ひ出しますつたら直に頭を削りますよ。」

と言つて立つた。乳母には一人子なので彼がかう言ふのを困り切つて、

「嫌なことをいふ子だね。汝が持つてる剃刀は私の念力で折つて了ふから見てゐなさ

う。」

これを聞いて帶刀は竊かに笑つた。乳母は兎ても中將が聞き入れさうにもなし、又自分の子の帶刀も斯う言ふから、縁談不調の由を右大臣の方へ通じようと思つた。

中將は落窪が例と違つて物思ひしてゐるやうだつたのは、此事を聞いたのだらうと思つた。二條邸へ行つて、

「貴女の御心配な譯を聞き出して喜んでゐます。」

といふと

「何ですか。」

『右大臣のごとでしたね。』

『いゝえ』

と微笑してゐる。

『嫌ですよ。皇女を賜はるともお受けはしますまい。前にも言つた積りですが、女にとつて嫌なことは男が他に女を拵へることだと聞きましたから、其事は丸で思ひ切つてゐます。ですから縦令人が何と言つても私には決して其處ことは無いと思ひなさい。』
と言ふので、

『さう思つていらつしてもお氣が變つたのでせう。』

『私が貴女を愛するといふのなら心配りといふ心配もありませうが、辛い目には決して逢はせないと言ふのですから心變りも何もないぢやありませんか。私の心は分りさうなものです。』

など、話しあつた。帯刀は衛門に逢つて、

『決して疑つたり心配したりすることは無いよ。あの世は知らんこと、此世では決して中將様のお心が變つて、奥方が辛い目にお遭ひになることはないから。』

と言つた。乳母は帯刀に甚く言はれて再び言ひ出すことも出来ず、又右大臣の方でも二條

邸に熱心に通ふと聞いて縁談のことは思ひ諦めた。

落窪は斯様に中將と睦じく暮してゐるうちに身重になつたので愈大切にされた。四月の賀茂の祭には大將の奥方は女御に上つてゐる姫君たちと一緒に棧敷に上つて行列を見る筈だつたので、中將に

『二條邸のお方にも見せてお上げなさい。若い人は物を見たがるものだから。それに私もまだ會はないで氣が、りですから、這麼序に會はうと思ひます。』

と言ふ。中將は嬉しさうな様子で、

『怎うしたのですか人のやうに物を見たがらないやうです。併し奨めて上がるやうにしませう。』

と言つて、二條邸へ行つて母上の言葉を傳へると、

『氣分が悪うムいまして困ります。かうして身重になりましたのも關はずに祭見物などに参りましたら、他のお方々にも失禮でムいませう。』

と言つて嫌さうなので中將、

「別に誰にも見られるのではありません。母上と二の姫だけです。私に會ふのも同じことです。」

と無理に奨めたから止むを得ず、

「お心まかせに、どうとも。」

と答へた。母上からの手紙にも

「是非ともお出かけなされ、面白き見物もこれからはいつでも一緒に致さうと存じ候」

とあつた。これを見るに見つけても、あの石山參詣の時、自分獨選り残されたことを思ひ出して悲しくなつた。一條の大通りに檜皮で葺いた立派な棧敷を仰々しく作つて、前には白砂を敷かせ草花などを植ゑさせて永久に住む御殿でもあるかのやうに拵へた。其日の曉に其處へ往つた。お伴の衛門や少納言はあまりの結構さに一佛淨土にでも生れたやうな氣がした。中納言の奥方が此女君に少しでも心を寄せてゐた者を憎んで罵るのを見馴れてゐたのに、此處へ來て見ると二條のお屋敷の御臺様附の人達だといふので殊に勞はつて大事にして下さるから嬉しいと思つた。中將の乳母は前に彼麼ことを言ひはしたものの、出て來て氣を付けて仕へながら、

「何れが悴の御主人様か。」

と落窪を尋ねて歩いて若い人達に笑はれた。母君は

「私は貴女と出来る丈親しくしようと思ひます。親子の間柄といふものは睦しい程、後でも心配のないものです。」

と言つて自分や二の姫の居る所へ入れた。様子を見ると、自分の二人の姫にも孫の姫宮にも劣らず美しい人であつた。紅の綾の袷一襲二藍染の織物の褂、羅の濃い二藍染の小褂を着て恥かしさうにしてゐる様子が綺麗で可愛らしい。女御のお腹に出來た姫宮は眞に普通の人とは思はれず、上品で氣高かく年は十二位で未だ幼く可愛らしい風であつた。この姫は年若い者等親しみ易くて、色々細かに語り合つた。祭見物が濟んだので御車を寄せて乗つて歸る。中將は直に二條邸へ落窪と共に歸らうと思つたが、母君は

「今日は騒しくて思ふ様に話も出來ませんでした。さあ本宅へお來でなさい。一日二日ゆつくりと話しをしませう。中將がせはしなく二條邸へ歸らうと言ふのは怎ういふ譯ですか。私の言ふ通りになさい。中將は本當に憎らしい人ですよ、あんな人のことを大事と思ひなされるな。」

など、笑つて戯談を言つた。御車が来たので、口の方には姫宮と二の姫、後の方には嫁の君と母君自身とが乗つた。順々に皆車に乗つて後に續いた。中將もその列に加はつて、大將の邸に着いた。本殿の西の方を急にしつらつて車から下して招じた。落窪附の女中達の居間としては中將のゐた西の對の端の間を當てた。かうして手を盡して嫁を大切にした。大將も可愛い子の嫁だから縁に引かされて、お附の女中等迄も大事にして大騒ぎをした。四五日ゐてから、

「お産でも済ましましてから又ゆつくり上りませう。」
と言つて歸つた。

母君は一度逢つてから前にも増して可愛く思つた。斯様にして中將は落窪を非常に大事にしてゐた。それで落窪はもう大丈夫だと中將の心を見抜いたので、或日中將に向つて、

「もう今になりましたは怎うかして父中納言に知られたいものと思ひます。年を取つて居りますから、今夜の命も分りませんのに、お目にかゝらずに了ひはせぬかと心細う存じます。」

と言ふと、中將

「左う思ふでせうが、まう少しの間我慢して知られないやうにしてお在でなさい。知られた上では氣の毒で奥方を懲らすことは出来ずまい。まう少し懲してやらうと思ひます。又私もまう少し出世してからにしよう。中納言は決して急には亡くなるやうなことはありますまい。」

とばかり言つてゐるので、遠慮して日を送つてゐるうちに、空しく年も明けて正月十三日安々と男子を産んだ。中將は嬉しくて今ゐるのは若い者ばかりで心配だからと、自分の乳母を呼んで、

「お母様がなまつたやうに萬事取計へ。」

と任せた。乳母はお湯などのお世話をした。落窪のうちとけた様子を見て中將様が他に心をお移しなさらないのは尤だと思つた。お産のお祝を我れも我れもと皆の人がしてくれたが委しいことは茲には省く。祝の諸道具は皆銀を用ゐた。又音楽の遊などをして騒いだ。

斯様に結構づくめなので、衛門はどうかしてあの憎らしい奥方に此趣を知らせたいものだと思つた。丁度其時少納言も子を生んだのでそれを乳母としてかゝへた。少納言は若様を大層大事にして仕へた。

任官の式があつて中將は飛び越して中納言になつた。藏人少將が中將になつた。大將は左大臣を兼ねる。で左大臣は

『斯うして汝が生れて、お祖父さんもお父さんも昇進するといふのはよい孫ぢや。』

と言つた。愈陛下の御信任が厚くなるばかりで大將は衛門督をも兼ねた。中將は宰相を兼ねた。あちらの中納言の方では、斯様に少將が昇進するにつけても、三の姫や奥方などは、丸切り見捨てられたので無くて唯疎遠になつた丈でも時につけて涙がこぼれる程悲しいのに、況して全然忘れられて了つたのだから非常に残念がつて騒いだが何の甲斐もない。落窪の夫君、衛門督は陛下の御寵遇が加はり幅が利く身となつたので、中納言を何かにつけて侮り懲らすことも多かつたが同じ様なことから書かない。

翌年の秋又男子を平からに産んだので、左大臣の奥方は

『よくまあ、さう平らかに續けてお産をなさるものですね。今度のは私の方へ預りませう。』

と乳母と共に左大臣邸へ迎へた。帯刀は左衛門尉で藏人を兼ねた。斯様に萬事思ふ通りで結構なことだが、父中納言に知られないのを落窪は不満足に思つてゐた。中納言は老耄した

上に、心配ばかりして少しも世間交際をせず唯引籠つてばかりゐた。落窪の君が其實母から譲られてゐた家は三條にあつて中々立派なものであつた。それは落窪の所有と決めてあつたのだが、中納言

『彼女はまう此世にゐないのだから私の物にしよう。』
と言ふと、奥方

『さうでムいますとも。生きてゐましても、彼塵立派な家を持つ程の身分ではムいますまい。子供等や私等が住むのに廣くて都合がようムいます。』

と言つて領地から上る二年分の物を盡く費つて、土塀から何から總て新らしく築き廻して、古いものは一つも交へずに、格別念を入れて拵へさせた。

今年も亦賀茂の祭が大層面白いだらうといふ評判なので、衛門督は、寂しい時節だから氣晴らしに女連に見物をさせようと、車を新調し人々には装束の類をやつて綺麗に行つて見ろと命じたので皆々色々支度した。其當日は豫め一條の大通りに杭を打たせて車を駐める場所を取つて置いたのだから、誰にも占領せられる心配はないといふので、裕然と出かけた。車は五輛ばかりでこれには大人二十人分乗した。其他尙二輛に召使の小

供が四人と下使しもつかひの連中が四人乗った。衛門督の外出だから前拂ひには四位五位の高官も多かつた。侍従をしてゐた弟は已に少將、小供で無官だったのが兵衛佐となつてゐるが、これ等の所へも一緒に行かうと言つてやつたから皆揃つて来た。で其車の總数は二十輛以上になつた。衛門督は順序正しく續いたなと思つて四邊を見渡すと、自分の杭を立て、置いた場所の向側に、古い檳榔毛車一臺と網代車一臺とが立つて居た。此方の車を整理させようとして、衛門督

「男車を親しいもの同志組合せて、彼方の北側と南側とに分けて駢ならべろ。」と差圖する。言葉に従つて其下使の男

「あの向ふ側の車を少し除けろ。御車を並べるのだから。」と言つたが、忌々しがつて聞かないので、

「誰の車か。」と衛門督が問ふ。

「源中納言殿のでんいます。」と答へた。





『中納言のでも大納言のでも、是程廣い場所に此打杭のあるのを知りながら何故車を駐めてゐるのか。少し除けさせろ。』

と言ふと下男どもが寄つて往つて車に手をかける。其車についてゐる男が出て

『何故汝等は其麼ことをするのか。甚く氣の早い男衆だ。豪らさうに意張つてゐる汝達の主人だつて中納言ぢやないか。一條の大通りを皆持つてでもゐるのか。無法な話だ。』と笑つた。

『我等の御主人様はな、西東の院様がたでも齋院様でも道を除けてお通りなさる程の御威勢だぞ。』

と口の悪いのが答へる。又一人が

『汝等の主人と同じと思つて一つ口に言ふない。』

など、口論をしあつてるばかりで急に除きさうにもないので、男連の車はまだ並べることが出来ない。衛門督は、前にゐた例の帯刀、今は左衛門尉藏人を招いて、

『あれを差圖して少し遠く除けさせろ。』

と言つたから、早速近くへ寄つて行つて無理に引き除けさせた。源中納言の方には男が少く

て止めることが出来ない。前拂ひの男が三四人は居つたのだが、

『つまりらんことだ。此處喧嘩はせんがよい。今の太政大臣の尻は蹴つても此衛門督の牛飼にでも手を觸れるものぢやない。』

と言つて近所の家の門へ入つて車を駐めた。車の中に乗つてゐる人たちは恐ろしがつてそつと透見をしてゐる。此衛門督は外見は恐ろしいものとして世間から思はれてゐたが、内心は至つて人なつこい寛大な人であつた。車の内では、

『本當に外聞の悪い話だ。怎うして意趣返しをしてやつたものだらう。』

など、話し合つてゐると、例の典藥の助といふ馬鹿な爺さんが其處にゐたが、

『先方の思ふ通りに此方の車を引き除けさせるといふことがあるのですか。』

と言つて歩いて行つて、

『さう無暗に非道いことをなさるな。杭を打つてある方へ此方の車を置いたのなら仕様がなないが、向側に立てゝ置いたのに除かせようとするのは怎ういふ譯だ。後のことも考へてしなさい。意趣返しをするぞ。』

と此馬鹿者が言つた。前の帶刀即ち今の衛門尉は典藥と見たので、何時からか此奴に會は

うと思つてゐたのに丁度よい所だと嬉しく思つた。主人の衛門督も亦典藥だなど見て取つて、

『衛門尉。彼麼ことを何故言はせて置くのか。』

と言ふ。心得て氣早な下男どもに目くばせをすると、下男どもは早速走つて往つて、

『後のことを考へてしろと爺奴がいつたな。一體、御主人様を怎うしようといふのか。』と長い扇を突き出して冠をばたりと打ち落した。見ると髪の毛は鼠の尻尾ほどで、額が禿げ込んでびか／＼と光つてゐるので、見物してゐる人どもはわい／＼と大騒ぎをして笑つた。爺さんは袖を頭の上に被つて狼狽して逃げ込もうとすると、下男どもがどつと寄つて來て一足づゝ蹴つた。

『後のことゝいふのは何だ／＼／＼』

と思ふ存分にいちめた。爺さんは

『死にさうだ。』

と叫んだが關はず責めるので、遂には息の根もとまつた。衛門督は眞實らしく虚制止をした。非道いさまに踏倒して車に投げ込んで押して行くと、源中納言の下男どもはそれを見て

懲々して、慄ひ上つて車の側へ寄りつかず、全く關係のない人のやうしてゐた。それでもまさかには後からぞろ／＼と附いて来て、督の方の人たちが此車を他の小路に引き込んで道の真中に置きざりにして去つた時に、辛つと此男どもが寄つて行つて、梶棒をもちあげた様子は間が悪さうに見えた。奥方を始めとして車中の人等は、

『見物もよさう。さあ歸りませう。』

と牛を車に繋いで、鞭を加へつゝ急いで走らせて狼狽して歸つた。所が喧嘩をした時に車體と車軸との結び目をぶつ／＼と切つて了つてあつたので、車體が大道の真中にはたりと落ちた。祭見物に出て来た下流社會の者等が是を見て限なく笑ひはやした。車についてゐる男どもは周章あわやうで轉まわつて急に持ち上げることが出来ず。

『何でも今日は外出なさつては悪い日だつたのだらう。這麼に恥といふ恥のありたけをかゝされた。』

と爪弾きをしながらまご／＼した。乗つてゐる人等の心中は大概推量される。皆泣いた。中でも奥方は娘等を前の方に乗せ、自分は後の方に乗つてゐると、思ひがけなく心棒から車體を引き落して牛は梶棒ばかりを曳き出した拍子に奥方は中から投げ出された。辛つと

のことで又這ひ込んだが臍を突いて怪我をして、おい／＼と泣いた。

『何の報いで這麼非道ひだうい目に會ふのだらう。』

と聲を上げて泣くと娘等は

『まあ見つともない。およし遊ばせ。』

ととめた。辛つてお附の人等が尋ねて来て此様子を見て氣の毒に思ひ、

『箱を擔かついで乗せろ。』

と指圖をした。これを見て見物人等は皆々

『本當に見つともないことだ。』

と笑つた。恥しくて堪らず、碌に口もきかず顔を見合はして立つてゐた。辛つとこのことで擔かつぎ上げ据かかる付けて曳き出すと、奥方は危あやい危あやいと大騒おどろぎをするのでそろ／＼練あつて行つた。辛うじて邸へ歸つた。

車を寄せると奥方は人の肩にかゝつて下りた。見れば僅かの間に目も泣き腫らしてゐるので、中納言は

『どうした、どうした。』

と驚いて尋ねた。事の次第を語ると中納言は残念がつて非常に嘆いた。

『随分ひどい恥だ、私は坊主になつて了はう。』

と言つたが、一方には妻子が不憫で、さうすることも出来なかつた。世間で此事を噂して笑ひ騒ぐのが左大臣の耳に入つて

『中納言家の車を苛めたといふのは本當か。女車を非道い目にあはせたのは中でも二條邸にゐる者たちがしたと聞いたが、一體何と思つて其處ことをしたのか。』

と尋ねる。衛門督、

『非道いといふほどのことは致しません。此方で杭を立て、置きました所に先方で車を立てましたのを、男どもが場所は澤山あるのに何故此處に置いたのかと言ふと、直ぐに言ひ募つて、とう／＼車の心棒の綱を切りました。それから人を打つたといふのは、其奴が失敬なことを言つたのが面憎さに冠を打落して男どもがねぢ伏せました。其模様は丁度弟の少將、兵衛佐なども見てゐました。人が評判する程のことは致しませんでした。』

と答へる

『人に悪く言はれるやうなことはするな。どうも私は心配だ。』

と注意した。落窪は氣の毒がつて歎くと、女中頭の衛門は

『でもあんまり御心配なさいますな。中納言様がゐらつしやつてのことならばですけれど……、典藥奴が打たれましたのは彼の時の報いで御座いませう。』

といふと、落窪は

『本當に汝は根性が悪いよ。私とは性が合はないから私の方でなく衛門督様の方のお附人になりなさい。あのお方はお前のやうに執念深くいつまでも物を根に持つていらつしやる。』

衛門は答へて、

『それではあのお方を私の御主人にいたしませう。私の思ふことを十分に下さりますから貴女様よりも大切なお方のやうな氣が致します。』

といつた。中納言の奥方は大病になつて臥たのを、子供等が集つて願を立てたりなどして癒した。

三の巻

二〇〇

中納言方では這麼不幸が続いて鬱ぎ込んでゐたが、例の落窪の所有してゐる筈の三條の邸宅を立派に造り立て、六月に移轉しようといふ運びになつた。今迄の屋敷で非道い目に逢ふのは、或は方位が悪いのかも知れない試して見ようといふので、娘達を引連れて引越さうと支度をした。衛門は此事を聞き付けて衛門督の寝てゐる處へ行つて、

『中納言様では三條の御屋敷を大層立派に御普請なさつて皆様お揃ひでお引越しなさる御様子でムいます。あのお屋敷は此方の奥方様のお亡くなり遊ばしたお母様が「あすこは失くさず持つてゐてお住ひなさい。お亡くなりなされた父上大宮様が立派にお拵へになつてお住居遊ばした所だから私は格別なつかしく思ひます」と呉々も言つてお置き遊ばした所ですので、只今目の前に見す／＼中納言様に取られて了ふのは残念でムいます。どうかして取られないやうにしたいものでムいます。』

と言ふと、督は

『屋敷の手形はあるのか。』

『それは確かにある筈でムいます。』

『そんなら屹度話しつけることが出来るだらう。引越す日を確かに聞き糺して来い。』
といふ。落窪は

『又怎麼ことを遊ばすかも知れませんがね。本當に衛門はよくない女になりました。只さへかういふ御氣性なのに側から煽てるやうなことをして。』

と恨み言をいふ。衛門

『怎うしてよくないことがムいませう。無理を致す譯ではムいません。』

督

『まあ黙つてゐなさい。一體此人は考がなくて、自分に仇するやうな人を可愛さうだ可愛さうだと氣の毒がつてゐる。』

落窪は、

『あゝ又私一人をお苛め遊ばす。』

といつて困つてゐた。衛門は督の意を呑み込んで、

『何と申して引越の日を承つて参りませうか。』

二〇一

ととぼけたことを言つて坐を立つた。

月が更つて六月となると衛門は何氣ない風で源中納言の家へ何時お引移りでまいりますかと聞き合せると、今月の十九日といふことが分つたので、其旨を督の君に申上げると、

「其日に三條の屋敷へ落窪の君を引移らせよう。其積りで若い女中どもを、まう少し召し抱へろ。あの中納言の所に相當の女がゐるか。もしゐるなら夫れを呼び寄せろ。後で先方に忌々しがらせてやらう。」

といふ。衛門

「それはよろしうまいります。」

と答へた。督の言葉を衛門が嬉しいと思つてゐる様子が明らかなので、督は自分と同じ心の奴だなど面白く思ひ、又此事は落窪には聞かせまいと小聲で話し合つた。督は落窪に向つて、

「或る人が大層好い屋敷を私にくれたから十九日には引越さうと思ふ。で、其日に着る人々の装束の支度をなさい。又此屋敷も修繕させようと思ふから急ぐのです。早くしな

らう。」

と紅の絹、茜染草などを出して縫はせた。這麼計畫があるとは夢にも知らないで頻りに急いで支度をした。

衛門はうまく謀んで中納言邸にゐる美しい女どもを呼び寄せた。奥方附で侍従の君といふ美しい女中頭や、三の姫附の典侍の君、大夫のおもとなど、それから下使ひの女では、まろやといふ美しい上品なのを色々甘く計つて、人を遣つては、

「只今飛ぶ鳥落す勢のお屋敷で女中を捜していらつしやるが、大層召使どもを大事にする所ですからおいでなさい。」

と言つてやつた。是等の連中は年が若いから、自分等の主人が権力が無くつてうろ／＼してゐるのを残念がつて、何處かへ奉公がへをしようと思つてゐる折柄、這麼うまい話で誘はれたので、其所は今の世間で人が大評判する勢のよいお屋敷だなど、思つて早速承知し、皆大急ぎで暇を貰つて親もとへ歸つた。落窪の君のゐる所とは夢にも知らず、又各自一所になることも知らずに、皆内密にして人に洩れぬやうに話を定めた。夫々人を遣つて車で一々二條邸へ迎へさせると皆やつて來た。見ると邸中には奉公する人の數も極めて多く、四邊の裝飾も非常に美麗を盡してゐる。集まつた連中は同じ屋敷で同じ場所に車から

下りると互に知つた者同士だから可笑しくて堪らない。聞いた通り美しい若い女が二十人許、白張の單衣ひとかまほ襲、二藍の裳、濃い紅の袴を着てゐると、又五六人の女が赤い袴に綾の單襲が引つかけ、薄色の縮綾ちぢみあやの裳など同じやうな装束をして幾群も幾群も出て来ては様子を見て行くので困つてゐた。落窪は少し暑氣まけの氣味だつたから督が己が見てやらうと言つて出て行つた。新參の女どもは主人公が自ら出て來られたので、各遠慮して俯うつむ向きながら督の様子を盗むやうに見た。濃い紅の袴、白い生絹すしの單衣、羅らの直衣を着て出て來られた姿は實に優しく美しかった。で、これなら旦那様も我等が思ふ通なよい御主人だと思つた。督は此等の人々を残らず見渡して、

『皆みな悪くない人のやうだ。衛門の案内だから不十分な點があつても彼是言ふべきではない。』

と言つた、落窪は蔭で聞いてゐて、

『衛門はなか／＼の御最負ですね』

と笑ひながら言つた。

『不十分なことがありましておわかりにならないのでムいませう。私は奥方の御前に居り

ましたから、皆さんをおめかしさせてから御覽に入れるのでしたのに、其暇ひまがムいませんでした。そんな譯でつひ。』

と言ひながら出て來る人を見ると阿漕であつた。で新參の女どもは、

『まあ、貴女あなたは此お屋敷で斯廢結構な御待遇を受けてお在おでなさるのでしたか。』

と驚いてゐた。衛門は偽つて今始めて氣が付いたやうな振をして、

『何だか何處かでお見かけ申したやうな氣がします。不思議ですね。』

といふと、女たちは

『かうして一緒にお集り致しまして本當に嬉しうムいます。』

と言ふ。衛門は

『此二三年、少しもお目にかゝれず、段々遠々しくなつて行くのを悲しいと思つて居り

ましたのに、此處でまでお目にかゝつて……』

など、過ぎた日の話などをしてゐると、又色の白い美しい三歳位の若君を抱いて、

『衛門さま奥へお來でなさい。』

といつて出て來る女を皆よく見ると少納言であつた。

『其お聲を聞くと過ぎた昔が又立ち返つたやうな心持がしましていろ／＼思ひ出します。不思議なことでムいますね。』

と言つてゐたが此事はあまり管々しいから省略する。兎も角も是等の女どもは、互に嬉しい嬉しいと言ひ合つてゐた。これは誰も昔馴染の衛門とか少納言とかがいづれも羽振りをかかせてゐるので都合がよいと思つたのである。

中納言郎ではいよ／＼明日引越したといふので、三條邸へ皆々の諸道具を運搬し、簾を懸け召使の荷物も運んだ。これを督が聞いて、家扶の但馬守、下野守、臺所掛長の衛門佐、其他下男などの凜々しい人物を呼んで、

『三條通りに私は屋敷を持つてゐるが、其處へ引移らうと思つてゐるうちに源中納言が、怎うしたのか彼處を我物顔に普請するといふ評判だ。いづれ何とか其仔細は言つてよこすだらうと思つて待つて何とも言はずにゐたが、明日引越すといふ話だ。もう黙つてばかりはゐられないから、今から往つて「此方で持つてゐる所を挨拶も無しに引移るといふのは怎ういふ譯か」と詰問して、運搬してあるものも押へて置いて渡してやるな。此方からも明日引越さうと思つてゐる。下男どもを早速引き連れて行つて詰所を

拵へて番をしろ。』

といつた。皆承知して急いで往つた。

往つて見ると屋敷の建築は立派で、批難の打ち所の無いやうに出来て、白砂を敷かせ簾を懸けさせたりなどしてゐる。此方からは荒々しい下男どもを勢込んで引連れて行つたので、中納言方の人々喫驚して、

『何處のお方ですか。』

といふと

『衛門督様の家扶執事等だ。此お屋敷は主人が持つていらつしやる所なのに、何故無断で引越して來たのか。一寸でも許して置くなと仰せを受けて來たのだ。』

と遠慮もなく入り込んで、

『此處は下男どもの控所だ』

などと勝手に場所を占領して、此處は何、彼處は何と色々取計つて造作を直させて了つた。中納言方の人どもは呆れ返つて屋敷へ走せ歸り、

『飛んでもないことが始まりました。衛門督様の家扶、執事などが大勢連れ立つて参りま

して此處は此方の邸だと言つて一人も出入させず、督様も明日引越していらしやるのだ」など、申して下男の詰所だの臺所だのと色々定めて了つて、所々方々造作をし更へました。』

と語る。中納言は老人の癖として驚き易く、

『それは非道いことだ。あの家は私の手本に手形こそ無いが私の娘の家ぢや。私の外に誰が持つてる筈があるものか。其娘が此世にゐるならばあれがさういふことをすると思はれるが、行方も分らなくなつてゐるのだから、そんな筈はない。怎うしたのだらう。あんまり莫迦げて相手にして争ふ程のことでもないから、あの男の父の左大臣殿に言つてやらう。』

と支度も碌々せず、氣も轉倒して裝束もそこへ狼狽ふためいて左大臣邸へ往つた。

『御主人に申上げたいことがありまして伺ひました。』

と言ひ入れると、大臣が對面して、

『何ですか。』

と尋ねる。

『年來私が持つて居ります屋敷が三條にムいますが、此間中から修繕させまして出来上りましたので、明日は引移らうと存じまして男どもに色々品物を運ばせました所が、衛門督様の家扶だとか申す者が参りまして「此所は主人が持つてゐる所だ。何故挨拶もなしに引越すか。主人も明日はお引越しになるのだ」と言つて私方の召使どもも通さないといふ次第なので驚きまして、お願ひに上つたのでムいます。あの家は私より外に人が持つてゐる筈はないと思ひます。怎うした譯でムいませうか。手形でもお持でムいませうか。』

と甚く嘆願的に言つたので、大臣、

『私は丸で知らないことですから、何とも御返事が出来かねます。仰る通りなら忤衛門の督が悪いやうでムいますが、併しいづれ何か仔細のあることでムいませう。早速忤に申しまして事實を糺しました上で委細御返事申上げませう。全く様子を知らないのですから私からは何とも申し様がありません。』

と上の空で身にしみない風で答へる。中納言は、それ以上に何とも言ひ様が無く非常に歎息しながら歸つて去つた。家に着いて、

「大臣に言つた所が丸で知らんことだから忤に聞いて置かうと言はれた。一體怎うなるのだらう。今迄永い月日を費して骨折つて造つて置きながら、人の笑ひ草になりはせぬか知ら……」

と長大息してゐた。

衛門督は御所から父左大臣の屋敷へ下つて見ると、大臣は

「中納言が来て斯様斯様言つたが本當か。怎うした譯なのか。」

と中納言の言葉を述べて問うた。

「左様でムいます。本當です。私は以前からあすこへ引移らうと思つてゐましたので、修繕を要する所は修復させようと存しまして人を遣りました所が、急にあの中納言が引越されるといふことでしたから、不思議に思ひまして真かどうか聞かせる爲に男を遣りまして抗議を申込ませたのでムいます。」

「中納言は自分より外に持つてゐる筈のない家をあんなにするのは實に無理だと言つてゐた。汝は何時からあすこを持つてゐるのか。手形はあるのか。さうして又誰が汝にやつたのか。」

「あれは二條邸に居ります妻のものでムいます。あれの母方の祖父でムいました宮様の家なのでしたのが傳つてあれの物となつて居りましたのを、あの中納言は老耄して了つて妻に巻かれて慘酷な非道いことばかりしましたから、憎くらしいのであの家も中納言には渡すまいと思ひましてかう致したのでムいます。手形は確かに所持して居ります。手形も持たずにゐて、自分より外に所有者は無い筈だなど、思つてゐるのは馬鹿馬鹿しいぢやムいませんか。」

「そんなら何も彼是言ふことはありやしない。早く其手形を中納言に見せてやりなさい。何でも大分慨嘆してゐる様子だから。」

「すぐに見せてやりませう。」

督は二條に歸つて明日引越しの行列の供人どもを呼び集め、又女どもの乗る車も別々に一當てがつてやつた。中納言は終夜嘆き明して翌朝長男の越前守を左大臣邸にやつて斯う言はせた。

「私自身で參上致す筈でムいますが、昨日歸宅しますと早速氣分が悪くなりましたので、失禮致します。お伺ひ致しましたことは如何でムいましたでせうか。」

と此言葉を取次ぐと、大臣、

『早速衛門督に尋ねましたが、自分の所有のやうに申しました。尙、委細のことは俾に直接にお逢ひ下さい。私には様子が分りませんから何とも決定致し兼ねます。併し手形が無くてあの家を持つてゐらつしやるといふのは少しをかしいやうぢやありませんか。』
と言はせた。越前守は早速衛門督の二條邸に行つて見ると、督は直衣だけを着て簾の側にゐたから敬意を表して畏つた。落窪の君も督の側にゐて其様子を見やつて可愛さうにと思つた。衛門や少納言は

『中納言の家にゐる時は何だつて私たちはあんな人を恐ろしい大切な御主人様と思つて、氣に逆らはないやうにしてゐたのだらう。』
と言つて笑つた。越前守、

『左大臣様のお屋敷にお伺ひ致しました所が、こちら様ではあの三條邸の所有權を持つていらつしやるやうに仰るとのことです。手形は實際お手許にお有りなされるのでムいいますか。それを委しく承りたく存じます。今迄貴方様の御所有と一寸でも承りました事がありましたら、決して私どもも斯様に申上げるのではムいけません。あの屋敷に

手を入れ始めましたから、もう二年許になります。其間何ともお話もなくつて今となつて斯様に邪魔を遊ばしますのはどういふ譯でムいいますか。困却致しまして願ひする次第でムいいます。』

といふと、

『今迄は手形が此處にあることだから、家といふものは手形の所有者より外に持つべきものでないと安心して、別に私の屋敷だとも宣言しないでゐたのですよ。併し貴方等のやうに引越さうなどゝなさる人がある時には私の物だと辯明しない譯にはいきませぬ。それとも貴方は手形をお持ちですか。』

と物柔らかに答へて、色の白い美しい三歳位な兒を膝に乗せてあやしてゐるので、此方は一生懸命で言ふのにあんな態度をしてと腹は立つたがちつと耐へて、

『あの家の手形が紛失したので尋ねさせましたが、未だ何方にあるか分りません。萬一それを人が賣つたのをお買ひになつたのではムいませぬか。どうもさうかと疑はれます。然もなくばあの家を他に人が取るといふ筈はムいませぬ。』

『手形を盗んだのを買つたのではないです。道理上私より外に所有する人がない筈なの

です。これには譯のあること、思つて斷念なさい。中納言へは其うちにゆつくり手形を私が見せて上げようと言つて下さい。』

と子供を抱いて内へ入つて了つたので、越前守は仕様がなく嘆息しながら座を立つた。

落窪はつくづく二人の話を聞いて

『お引越しなさるといふのは三條の屋敷でムいますね。いづれ又後で私だといふことが分りますのに、先方で今迄手をかけて普請をなさつて引越さうとするのを邪魔しましたら怎麼に口惜しく思召すでせう。親を苦しめるのは佛罰も恐ろしくムいます。只今お側にゐて孝行することの出来ないのさへ不本意に思つてゐますのに、こんな邪魔をしてお嘆かせ申すのは心苦しうムいます。これも皆衛門がすることですムいますね。』

と氣の毒がつて言ふと、

『怎麼親にだつて自分の家を無理に取られる人があるものですか。中納言を困らせる罪は後で孝行をして償ひなさい。縦令貴女が引越すまいと思つても、私は女たちを連れて引移りませう。かう言ひ出して置いて止めるのは不體裁ですからね。あの家を中納言に上げようと思ふなら、親子の名乗をした上で改めて差上げなさい。』

と言ふので仕様がなくて復何とも言はなかつた。

越前守は家に歸つて中納言に言つた。

『もう丸で駄目でムいます。取られ損でやめにするより外はありますまい。こちらでは一生懸命になつて言つてゐますのに、平氣な態度で可愛らしい子を膝に乗せて愛しながら、こちらの言ふことには耳も傾けません。擧句の果には手形が見度いなら後でゆつくり見せて上げると言つて引込んで了はれました。左大臣は、「私は知らん。衛門督が手形を持つてゐるといふから此方に道理が多いやうだ」と言はれるし、丸で仕様がありません。何故手形を捜し出しなさらなかつたのですか。彼方では今夜お引越したといつて女車の支度やお供の人のことなどを色々準備して騒いでゐられましたよ。』

中納言は一向物も分らぬやうになつて甚いことになつたと思つて聞いてゐた。

『落窪の君の母が死ぬ時にあの女に譲つて置いたのを、私もすっかり忘れて手形を取らずにゐたうちにあんな譯で落窪がなくなつて了つたのだ。屹度あれが賣つたのを買つたに違ひない。實に外聞の悪いことだ。朝廷に訴へてもあの人が勢を振つてゐる時世だから誰も裁判してくれるものはない。いろ／＼と費用をかけて造つたのが残念だ。運の

悪い者は口惜しいなあ。』
と空を仰いで呆然してゐた。

衛門督の方では愈引越したといふので、女中に装束一揃づゝをくれたから、新参者は早速流行の品を貰つて嬉しがつた。中納言邸では道具でも運び返さうと人を遣つたが、一寸も出入を許さないといつて歸つて來たので奥方は手を叩いて残念がつた。

『あの衛門督は私には怎うした敵でこんな私に私の心を惱ますのだらう』
と腹を立てた。越前守は

『今となつては丸で仕様がありませんよ。道具だけでも取つて歸りませうかといつて掛けあふと「早くお取り下さい」と素直に答へて置きながら、受取りに行けば一向家の内へもに入れてくれいから何とも仕様がありません。相手が相手に喧嘩にもならないですらね。』

と言つて唯集つて、先方を恨むより他はなかつた。

落窪等は宵の八時頃に引移つた。車が十臺ばかりで行列は立派であつた。車から下りて見ると本當に本殿は皆裝飾が出来上つてゐた。屏風几帳の類を立て、疊を敷きつめてある。

此有様を見て嘸かし中納言の方では残念に思ふだらうと氣の毒だつた。元來これも奥方を忌々しがらせるやうにしたことなのである。落窪は中納言の心中を推量して何の興もなく唯氣の毒と思つてゐた。督は

『中納言家から運んで來た荷物を亡くすな。間違なくすつかり返してやらう。』
と言つた。斯うして騒いでゐると、中納言方では果して引越したか怎うかと人を遣つて様子を見させた。使が見て歸つて、一々其様子を語り、

『立派にしてお移りになりました。』

と報じたので、もう仕様がないと嘆いた。それとも知らず督の方では皆々遊び騒いだ。衛門は督が斯様に取計つたことを、自分の思ふ通りだと嬉しがつた。翌朝、越前守が

『運んで置きましたものをお返し下さいまし。』
と言つて來た。すると、督、

『三日間は此處の物は外へは持つて去つてはなりません。今日明日二日たつてから取りにお來でなさい。さうして品物は確かに此處へ運んだのですか。』

と言つて丸で聞き入れないから中納言方では非常に困つた。三日間は遊び騒いで當世風に

派手にやつた。

四日目の早朝に越前守が来て、

『切めて今日は道具をお渡し下さいまし。女どもの櫛箱など、日用品を運んで了つたので不便で困つて居ります。』

と嘆願した。可笑しく思ひながら皆目録に引合して返してやつた。督

『あの昔の古蓋の鏡の箱はないか。あれを道具に添へて返しなさいよ。奥方は寶物のやうに思つてゐるらしかつた。』

と言ふと衛門が面白がつて、

『私の所にムいます。』

と持つて来た。此を見たことの無い女等は

『まあ、随分非道い物だね。』

と言つて笑つた。唯此儘に返すよりもと

『一寸しるし丈でも何か書いておやりなさい。』

といふと、落窪の君

『いゝえ、否でムいます。こんなお氣の毒な場合に私のことをお知らせするのは心苦しくムいます。』

と嫌がるのを

『そんなこと言はないで、さあ早く。』

と促がした。已むを得ず鏡の底の敷板を引繰返して

『あけくれに憂きこと見えし増鏡流石に影ぞ戀しかりける。』

と書いた。色紙一重で是を包んで、木の枝に付けて、

『越前守を呼んで是を渡せ。』

と衛門に授けた。越前守が督の前に出ると、督は、

『貴方等が嘘變に思ひなさるだらうとは思つたが、此方へ何の挨拶もなくお引越しなさると聞いたので不審に思つて、つひかうしたのです。此お氣の毒なことをしたお詫も自分で申上げませうし、又手形も確かに御覽に入れますから、今日か明日のうちに屹度お立ち寄り下さいと中納言に申上げて下さい。貴方方も今は定めて不都合なことをする男だと思つてゐるでせうが、いづれ私とも睦しい間柄になるでせう。』

と言つた。機嫌がよい。越前守は心中不思議がつた。

「中納言には屹度此方へお立寄りなさるやうに。それから其時はお供して貴方もおいでなさい。」

と言ふので承知して、辭して歸らうと歩き出すと、衛門が開き戸の所にゐて、

「こゝへお寄り遊ばせ。」

と人をして言はせた。怪しみながら歩み寄ると簾の下から美しい袖口を出して、

「これを奥方へ差上げて下さいませ。以前大層大事に思召したお品ですから此方では今迄お失しなさらずに持つておいでになつたのですが、此度お道具をお返しするにつけて思ひ出しなすつてお送り遊ばすのでムいませ。」

といふと不思議がつて、

「誰の御傳言ですか。」

「それは自然お分りになるでせう。斯う申し上げる私のことも聲だけお覚えがありませんか。」

といつた。越前守は心中で阿漕だな、あれが此邸内に奉公してゐるのかと思つて、

「昔貴女がゐた私の家のことは全然忘れて了つたのだから、私は懇意らしく話すのは止めよう。それは申藏だじやうざんが實際のことを言へば、此お屋敷へ参つた時は昔馴染としてお尋ねすることにしよう。」

と言つてゐると、

「まう一人居りますよ。」

と言ひながら一人の女が顔を出した。見ると少納言なので、不思議にもよく集つたものだと思つてゐると、又奥の方で、

「他にまだ澤山お在ですから、私のやうなものは何も申しませぬ。」

といふ聲を聞くと二の姫の所にゐた侍従といふ女であつた此女は越前守が思ひをかけて時通つたものである。こんなに自分の家にゐたものの聲ばかりで話しかけたので、喫驚して怎うしたのだらうかと不思議で答へることも出来ない。衛門、

「三郎様は只今は何になつていらつしやいますか。元服はなさいましたか。」

「さうさ、此春大夫になつた。」

「是非こゝへお來で下さいませ。お目にかゝつて申し上げたいことが澤山たまつて居りま

すとお傳へ下さい。』

『それはお安いことだ。』

こんなことを言つて、衛門が渡した包物を何かと思ひながら急いで出て去つた。道々、此邸内の様子を考へて見ると實に不思議で、或は落窪の君が此處の奥方であるのでもあらうか。阿漕と言つた女中はなか／＼得意らしい様子であつた。又詭へたやうに自分の屋敷の人が集つてゐるのは他人がゐたのよりは流石嬉しいなど、思つた。此人は國守として田舎にばかり往つてゐたので、奥方が落窪をいぢめたことも知らないのであつた。

越前守は中納言邸へ歸つて来て、斯様斯様に衛門督が言はれたとて委しく様子を語つて、此包物を奥方に差上げる。思ひもよらぬと思つて、開けて見ると自分の箱であつた。これは曾て落窪の君に遣つた品のやうだと思つて見ると、怎うしたのだらうと胸騒ぎがしたが、箱の底に書いてあるものを見れば、確かに落窪の君の筆蹟なので、呆れ返つて目も口もあいたきりであつた。此數年來非道い恥ばかりをかゝせたのは此奴の仕業だと思ふと残念で残念で何とも言ひやうがない。家中響くやうな大声を上げて騒ぎ罵つた。中納言は家を取られて了つて、憎い仇敵と思つてゐた心も、自分の子がしたことだと思ふと憎

くもなく、今迄の恥も全然忘れて了つて。

『澤山の子供の中でも彼は一番幸運を受けるやうに生れつゝいてゐたのに、何故大事にしてやらなかつたのだらう。あの三條の屋敷は元來彼の母の家なのだから、彼女が取るのは道理なことだつた。』

と言つてゐた。で、奥方は忌々しくて氣が氣でなく、

『あの屋敷を取られるのは仕方がないとしても、今迄手を入れて植ゑ込んだ草や木はどうするのですか。あれは此方へ運んで來させなさい。それで、新に家を買ふ時の費用の補けにませう。』

といふと越前守、

『それは何といふことですか。あかの他人に對するやうななさり方ではありませんか。どうも私どもの一族には歴としたものがなくつて、逢ふ人毎に「面白の駒はどうです〜」と笑はれるのが恥かしかつたのに、同じ若殿達のうちでも殊に陛下の御信任の厚いお方と姻戚の關係を結んだのはたのもしいことです。』

といふと、三男の大夫は

「ほんとに、三條の屋敷などはどうでもよいです。落窪の君がいちめられなさったことは實に甚かつた。」

越前守

「何に、何に、いちめられたといふのは、」

「怎麼につらかつたらう。」

と大夫は言ひながら、始から順々に細かく語つて、

「さぞ阿漕どもは話合つてゐるだらう。落窪に今日お目にかゝるにつけても恥しいことだ。」

と言ふので、越前守は爪弾をしながら、

「あゝ非道い話だ。私は田舎にばかりゐて知らなかつた。呆れたことをなさつたものだ。あの衛門督はそれを根に持つてこんなに恥を何度もかゝせなさつたのだな。私等を何と思つていらしやるだらうか。もういつそのこと丸で交際しないであらうか。」

と恥ぢていふと、奥方

「あゝやかましい。今になつて取り返されることぢやあるまいし。つまらない。お止し

なさい。唯憎らしかつたからしたまでのことですよ。」

と言ふ。今更何とも仕方がない。

「少納言や待従なども彼處にゐたよ。」

と越前守が言ふのを女中どもが聞いて、

「私どもは何故今日まであちらへ行かないで、つまらない日を送つて來たのでせう。」と羨しくて堪へられずに、

「今からでも行きませう。あのお方はお心がおやさしかつたからお使ひ下さるでせう。」と若い女達は言つた。姉妹の姫たちは皆呆れてゐたが、其中でも三の姫は自分の夫の藏人少將を横取りした人と血縁の間柄だから、親類として督と交際するのは忌々しいと思つた。四の姫は自分を許して這麼悲しい身の上にした人だから、人一倍督に遭ふのが辛いと思つた。例の面白の駒との間に何時の間にか出來た子は已に三歳になつてゐる。父には似ないで誠に可愛らしい女の兒であつた。自分の身の不幸を歎いて尼にならうと思つたが、此乳呑兒が不憫さに絆となつて決心することが出來なかつたのである。面白の駒を憎らしたが、つて、すげなく取扱つてばかりゐたので彼は來にくがつてゐた。

中納言は悲しいことは全然忘れて了つた。今迄自分が人望もなく尾羽打枯らして、人に輕侮けいぶされてゐたのを嘆いてゐたのに反して、急に面目を施したやうで嬉しくて。早速衛門督の邸に行かうと支度をしたが其内に晩くなつたので、

『今日は日が暮れたから明日にしよう。』

と止めにした。奥方は、中納言が落窪に逢つたら自分の生んだ子よりも立派な有様に嘸驚ふあせくことだらうと胸を痛めた。三の姫と四の姫は

『清水しみずで使をよこしてまだ懲りないかと言つた其譯わけが今になつて分りました。どうせ遂しまひには名のりなざるのに随分非道いことをなさつたものですね。女中どもが大勢暇をとつたのは、それぢやあの落窪の君がお招びなさつたのでしたね。永年非道い姿で押籠おしこめられてゐらしたのを忌々しいと思ひ込んでゐらしゃつたものと見える。』

といふと、奥方、

『それが本當に口惜くせしい。這麼にいろ／＼非道ひどい意趣返いしゆかへしをされたのを、怎うかして又返報へんぱうしたいものです。』

『併し、まう其處そこことは思召おもひましますな。婿君たちも澤山お在り遊ばすことですから其後

迷惑めいわくにもなります。典樂てんがくの助を甚く打たせたのは、あのことを思つてのことと見えます。

夫ちとの君が何もかも御存ごぞんじて彼塵かみになさつたのでせう。』

こ口々に色々語り合つて其夜を明した。

翌朝衛門督から手紙が來た。中納言が受取つて見ると、

『昨日御傳言下ごでんごんさるやう越前守へお頼み致し置き候ことはお聞き遊ばされ候や。御閑暇ごかんげにも候は、必今日御光來下され度待上候。いろ／＼申上げたきことも有之候へば。』

と書いてある。其返事、

『昨日は御傳言拜承仕り、早速お伺ひ致さんと存せしも、日暮に相成り失禮仕候。今日は只今より參上仕るべく候。』

と言つてやつて出掛ける用意をした。越前守も一緒に來いとのことであつたから、中納言の車の後の方に乗つて往つた。三條邸では中納言が來たことを取次ぐと、

『いちらへ。』

と衛門督自から案内したので中納言は奥へ通つた。母屋の南側の廂ひましの間で對面した。落窪は几帳いじやうの内に居た。側にゐた女中どもにあららの北側の座敷へ去つて居れと言つて座を外

さした。

督は中納言と對座して、

『いろ／＼私の方でお詫を申上げなければならぬこともムいですが、又此處に、お目にかゝりたがつて獨で嘆いてゐる人がありますから、其人のことも此序にお話し申上げようと思ひましてお來でを願つた譯でムいます。此屋敷を這處に御所有となさつて御普請なさつたのは一通りは御尤でムいますが、手形の文面では貴方よりもこちらで所有すべきものと思はれますのに、目と鼻のやうな近い所でありながら何の御沙汰も無くてお引越しになるといふのは此方を人の數のうちにはお入れにならないのだらうと存じ、何もさう御輕蔑なさらなくともと考へまして俄に引越して參りました。年來修理を加へ御丹青をお疑らしになつたのに、お邪魔を致すやうな風で引移りましたのは誠に失禮でムいます。兎も角も此處は中納言に差上げてくれといつてあの人が歎きますから、お譲り致します。確かに御知領遊ばせ。今日は其手形をお渡ししようと思ひましてお呼び申したのでムいます。』

といふと、中納言、

『お言葉實に恐れ入りました。數年前に不思議に家出をして丁ひまして後、存命してゐるとも何とも聞きませんでしたので、多分死んだものだらう、私が年が若うムいましたら其内に何處かで廻り逢ふ時もありませうが、斯處に老衰して丁ひまして、今日明日の命も分らぬ程ですのに、振り捨てて出て去つて影も形も見せないのは、矢張死んで丁つたものとするより外はないと思ひまして悲しんで居りました。此家はあの子が存命してゐるならあれの物となる筈ですが、死んだ以上は何とも方法がない。當然私の所有に歸すべきものと考へまして、甚く荒廢せぬ内に修繕したのです。お宅にあの娘が居りませうとは思ひもありませんでした。誠に結構なことで、願つたり叶つたり所ではムいませぬ。今日迄これをお知らせせなさらなかつたのは私を不都合な奴だと思召してのことか、それとも耻かしいから知らせまいと思ひなかつたのでありますか。此二つの疑問はどちらにしても私は貴方に對して恥しい次第であります。手形は頂戴致しません。矢張今迄通りに上げて置きたうムいます。此老年になりながら死なずにゐるのを不思議と思ひましたが、成程あの娘の顔を見る爲でムいましたなあ。今になつて種々追懷致しますと悲しくなつて來ます。』

と言つて憤氣返つてゐるので、督は流石に氣の毒になつて來て

『あの人はすつと以前から「御老體のことだから今夜にもどういふことがあるかも知れない」といつて逢ひたがつて嘆いて居りましたが、私が所存がありましてまう暫くと止めて置いたのです。といふのは私はあの人がお屋敷の西の方に住んで居つた時分から時忍んで通つて居りましたが、お取扱ひ方が他のお子方とは甚く違つて粗末にしてありました。又奥方のお仕向け方が非道くて、召使の者以上呵責なざるのを見聞きして居りましたから、私はあの人に「あなたは生きてゐても親達は別によく生きてゐると思ひはなさるまい。出世して人なみの身分になつて孝行の出来るやうになつてから親にも名を知られなさい」と申したことでうりました。納戸に押しこめて典藥の助の自由にするやうに許しなかつたのをあまりのことと思ひましたから、あの人が行方不明になつても何とも思召すまいと思ひました。私が其節可愛さうと感じましたことが忘れられませんでした。貴君に悪感を抱いたのではありませんでしたが、奥方のことを非道い人と思ひましたので、祭を見に参りました時にも御屋敷の御車だと聞きまして無禮なことを致しました。其無禮なことをしました男どものことを、止せ／＼と一方では制するやうな風を

しながら、其實あまりよくは制めなかつたのを、變なことをすると屹度思召したらうと存じまして心苦しううりました。彼女は朝晩他のお子様方のやうにお側に仕へてゐることが出来なかつた身だつたのに、今でも少しもお目にかゝれないのを夜晝嘆きますから、世間の親子の間柄は格別なものだと思ひまして、怎うかして親しくお仕へしたいと考をきめました。それに又生れた子供も益々生長しますのをお見せ申さうと存じましてお招きした次第でうります。』

と一々事細かに物語つたので中納言は非常に赤面して、今迄いろ／＼非道い目にあはせたのは昔のことを覚えてゐてのことだと、限なく氣の毒で返答も碌に出来なかつた。

『別に他の子どもよりも軽じたといふのではありませんが、母のついてゐるのは、母から「これのことを先へどうかして下さい」と言はれるものですから、つひ引かされて實際可愛さうなこともありませう。ですから今のお言葉は一々御尤でうります。申譯のしようもありません。典藥のことは實に忌々しいことです。あんな奴には誰が許しませうか。納戸に籠めましたのは不都合をしたと聞きましたので、腹が立ちまして私が許したのです。それは兎も角、何よりも先づお子様達にお目にかゝりませう。どちらにおい

でいす。今直ぐにお目にかゝりたうんでいます。』

と言ふと、督は落窪の君の前に立て、あつた几帳を押しつけて、

『こゝに居ります。——出て来てお目にかゝりなさい。』

といふと、落窪は恥しいけれど膝行出た。父の中納言はそれを見ると大層美しく重々しく大人びて、眞白な立派な綾の單衣襲、二藍の織物の袷を着てゐた。此人よりも縹緞がよいと思つて可愛がつた娘達よりも優つてゐるので、斯麼に美しいのに押籠めて置いたのを本當にさぞ辛く思つたであらうと心中に恥ぢて、

『汝は私を恨んで今迄名宣らなかつたのですね。今かうして逢つたので私は實に心がのびくして嬉しい。』

といふと女君は

『私は決して恨んでは居りませんが、お母様が丁度私をお叱りになつた時に主人が来てをりまして様子を見て、それを根に持つて居たのでムいませう。暫時は知られないで居れ」とばかり主人が申しますので控へて居りました。丸で心にもない失禮を致しまして何と思召したらうかと誠に心苦しう存じます。』

と言ふと、

『其の時は非道い恥をかゝせたものだ。何を根に持つて斯麼ことをなさるのだらうと思つたが汝を疎かにした意趣返しをなさつたのだと今日承つて却て私は嬉しく思つてゐる。』

と笑つたので、女君は誠に勿體ないと思つて

『それにしましても長多いことでムいます。』

と答へてゐると、督は可愛らしい男の子を抱いて来て、

『これをお覽なさい。性質剛巧です。天下第一のあの酷い奥方でもこれを憎がることは出来ずまい。』

と言ふと

『またそんなことを仰る。』

と落窪は氣の毒がつた。中納言は其子を見ると、老人の常として、只可愛らしいばかりで、にこ／＼しきつて

『此方へお來で、此方へ、』

と言つたが、若君は此處爺さんを見つけないので怖がつて、お父様の首にかじりついた。中納言

『ほんとに、どんな鬼見たやうな心の人でも此子を憎むことは出来まい。』

と言つて、更に

『大層お大きくいらつしやるが、お幾年ですか。』

『三歳になります。』

と父が答へる。

『此下はありますか。』

『此弟は左大臣の方へ呼ばれて居ます。まだ女の子もありますが、今日は一寸障りがム
います。後でお目にかけてませう。』

など、言つて、お膳を差しあげ、お供の人たちにも、仰々しい御馳走といふのではないが
牛飼に至るまで結構な饗應をした。

督は

『衛門、少納言。あの越前守をお呼びして馳走をしてお上げ。』

と言ふので、衛門は女中の座敷の方に越前を喚び込んだ。越前守は、恥しかつたが、今迄の
事は自分がしたことではないと思つて、喚ばれるまゝに座敷へ通つた。三間許りの部屋で、
疊も美しいのを敷きつめ、選びすぐつたやうに繚綴のよい揃つた女が二十人許居並んで
た。御主人の前にゐたのが、彼方へ行つてゐると言はれたので此處へ集まつて居るのであ
つた。越前守は女好きな人だから興あることに思つた。嬉しがつて見渡すと知つてゐる女
ばかりでも五六人はあつたので呆れて物も言はれなかつた。是も矢張此處へ呼び取られた
のだらうと思つてゐた。衛門

『御主人様から酔はしてあげろと仰せがあつたのですから、赤くおなりにならなくつて
は申譯けがありません。若いお方々、どなたもお盃を上げて下さい。』

と言つた。交々強ひたから泥酔した。越前守

『衛門の君助けて下さい。さう人間以外のものでもあるやうに苛めなさるな。』

と言つた。逃げようとする若い綺麗な人がいろ／＼と面白いことを言ひながら圍んで放
さないから遁ることも出来ない。困り切つて其處に倒れて了つた。

中納言も督の君も盃の數を頻りに重ねて、酔が廻つて種々の話をした。

『今からは私が出来るだけの事はしてあげようと思つて居りますから、思召すことは御遠慮なく仰つて下さる方が嬉しうございます。』

と督が言ふと中納言は非常に嬉しく思つた。日が暮れたので歸らうとすると中納言には着物の箱を一對、即ち其片方には直衣装束、まう一方には束帯一領に由縁ある石帯を添へて贈つた。越前守には女の装束一揃に綾の單衣襲を添へて遣つた。中納言は酔つて辭して出ながら、

『此世に今迄生きてゐたのを辛いと思つてゐたが、圖らずも嬉しい因縁で。』

など言つた。お供の人は多くもないから、五位の者には装束一領、六位には袴一領、下男には反物の巻いたのを一本づゝやつた。供の人たちは此兩家は仲が悪いやうだつたのに今日は怎うしたのかしらと不思議に思つた。

中納言は歸郎して奥方に衛門の督の言つたことを委細語つて、

『典藥の助には本當に娶せようとしたのか。督が私を恥かしめるやうに言つたから顔が赤くなるやうな氣持がした。孫は何とも言ひやうがない程可愛らしかつた。あちらの様子を見ると大事にかしづかれてゐてあの女は非常な仕合者だ。』

と言ふと奥方は忌々しくて堪らない。

『そんなこと聞きたくもありません。貴方もあの頃はあの娘を物の數にも思ひなさらなかつたのではありませんか。納戸に押籠めよとは貴方こそ仰つたのではありませんか。私は存じません。どうでも勝手にしろとお見放しになつたからこそ典藥でも何でも寄りついたのでせう。今然るべきお方があの娘を大事になさるからといつて、御自身でなさつたことを人がしたやうに仰るのはどういふ譯ですか。あんまり花々しいことはいつまでも續くものではございませんよ。』

といつた。越前守は甚く酔つて物に寄りかゝつて臥轉びながら、三條の邸の様子の立派だつたことを語つてゐた。

『三十人の女中連の中に取り籠められて無暗に酒を強ひられた。女中の中には三の姫付の某、四の姫付の何の某、其他澤山此處にゐた女どもがゐた。花をかざして着飾つてゐるやうに美しくして得意がつてゐたよ。』

といふのを三の姫と四の姫とは一所に臥てゐて聞いて、

『ほんとに世の中といふものは情ないものですな。あの人が落窪に住んでゐて、納戸に

押しこめられた時は、私等よりも多勢おほぜいの人を使ふ身分にならうなど、は思ひもよりませんでした。それに引かへ私等わたしらが斯かうしてゐるのを父上母上は何と思召すかと思へば恥かしいかたじけなくいますね。怎いかうして這麼このやうにしていつまで居りませう。尼にでもなつて了しませう。』と語つて三の姫が泣くと四の姫も泣いて

『それが本當に恥しうかたじけなくいます。這麼このやうに不仕合な運を持つてゐる身とも知らないでお母様おははさまが格別に大事にして育て、下さつたのに。世間の人は私たちを此節このときでは何と思つてゐるでせう。私は先頃幸さいひことが出来た時に尼にならうと思ひましたが、何時いつの間にか身重になりましたので、其儘このままになつて了しましました。此兒このこが産れましてからは、矢張いか人情にんじやうでも申すものでせうか、これが物心を知るまでと思ふやうになりまして今まで斯かうしてをります。』

と二人語つて泣いて、四の姫

『人の上と昔は見しをありふれば今はわが身のうき世なりけり。』

三の姫も尤なほだと、

『うきことの淵瀬ふちせにかはる世の中はあすかの川の心地こそすれ。』

といひつゝ夜を明した。

翌朝になつて昨日の贈物を見て中納言は

『色いろといひ何なにといひ此爺おぢいの身には結構結構すぎる。これは兼ねて聞き及んだ名高い帯だのにどうして私が貰もらはう。お返ししよう。』

と言つてゐるうち衛門督ゑもんとくの所からお手紙でうみますと數本の手紙を取次の者が持つて來たので、急いで各々受取つて見た。中納言には

『昨日は日の暮れるのが惜しく思はれ候。お急ぎ遊ばされし故積たまりる話も思ふやうには申上げずに終しまひ候。今後は時々お立寄り遊ばされ度、若しお來きでなくばお恨み申上まぐべく候。差上申し、手形は何故お忘れ遊ばし候や。兎も角速すみかに當方へお引移り願上候。さ候はずば矢張いかお心解こころとけぬこと、氣にかゝりて悲しみ申すべく候。』

とあつた。落窪らくくぼからは四の姫へ手紙が來た。

『只今迄永年御様子如何と御心配申上げお尋ね致したうは存ぞんじながら、憚おそるべきこと多くてつひく失禮致し候。あなた様には私をお忘れ遊ばされしこと、存ぞんじ候。

忘れにしときは山の岩つゝじいはねど我に戀こひはまさらじ

と思ひ候ふにつけても心にかゝり候。御母上様はじめ皆々様にも、今度こそはお目もじかなふことゝ存じ候へばそれのみ嬉しく喜び居り候旨お傳へ下され度願上候。』

とあつた。丁度其處には姉妹四人並んでゐたので、此手紙を交々互に手にとつて見て、姉君達は自分等の所へも手紙をよこしてくれよばよいにと今は言ひたい位に思つた。落窪の部屋に居た頃は誰も寄りつきもしなかつたのに今更かう思ふとは現金なものだ。中納言の返事

『あの儘にて昨日は御厄介に預り居らんかと存せしも、生憎方角塞りの方に當り候故お暇申上げ候。今後は楽しく朝夕參上致さむと思ふ丈にても命も延び候。さてお惠み下され候手形は頂戴致さぬ旨を昨日も申上げしに、猶斯様に強ひてお贈り遊ばさるゝはお腹立の深き爲めならんかと恐縮致候。又御帶も私如きみすばらしき翁にはあたら惜しきものに候へばお返し申上げんと居し候へども、お志故しばらくお預り申上げて後更めてと存じ居り候。』

とあつた。四の姫からの返事は

『今迄永年お住ひのありかも分らず、お尋ね參らすべき様もなく心にかゝり居り候に此

度の御消息誠に嬉しう存じ上げ參らせ候。忘れしならんとはあんまりの御推察と恨めしく存じ候、

うちすてゝ別れし人をそことだにあらで感ひし戀はまされり。』
と言つてやつた。

此以後は、督の方からは中納言へ格別注意して勤めた。中納言は非常に頻繁に三條邸を尋ねた。越前守や大夫などは現今權勢のよい家だから恥かしいのを押して常に親しく出入した。落窪の君はこれを只嬉しく思つて怎うかして力になつてやらうと思つてゐる。中でも格別大夫を子のやうに思つた。

『今となつては怎うかしてお母様や姫達ともお目にかゝりたいものです。こちらへお來で下さい。先のお母様と幼い時にお別れして了つてからは、常に御一緒に居りましたので、本當のお母様のやうな氣が致します。怎うかして孝行がしたいものと思つてゐましたのに久しくお目にかゝりませんからお見かぎりなされたせう。姫達へも同じやうに申上げて下さい。』

と傳言する。越前守は歸宅して其話をして

「私を親切にして下さることは格別です。」

と語ると、奥方は「身分が高くなつたからさうも思ふだらう。私が非道く打懲らしたのを遺恨に思つてゐるならば私の子供にも辛く當るだらうに、さうでもないのは今迄のことは夫の衛門の督の心からしたものと見える。本當にあの物を縫つてゐた晩に片方を持つてやつてゐたのは此人であつたのだな」と考へて氣が折れて段々と手紙を遣り出した。

斯うしてゐるうちに衛門の督は妻の君と相談した。

「中納言は甚く年を取つたものだ。世間の人は親の爲に孝行をするのは面白いことと思つてゐる。世間では五十賀とか六十の賀とかいつて音楽の遊びなどをして親に見せ、或は年の初めに若菜をあげ又は八講といつて經を寫したり佛像を書いたりして供養するこゝとがあるものだ。で、私等もいろいろ珍らしいことをしよう。」

と言つて

「何をしたものだらう。生きてゐるうちに四十九日をする人もあるが子供が、してあげるのでは變なものだらう。前に言つた色々のうちで怎れがよいか言ひなさい。何でも貴女のしようと思ふことをさせてあげませう。」

と言ふと落窪は非常に嬉しく思つて

「音楽は誠におもしろございますが來世までも益になるといふものでもありません。四十九日なんぞは嫌なことです。八講は此世の爲にも尊いし、又來世の爲にもよいこととムいませうから、それを立派にして上げたい存じます。」

といふと、夫の君

「よい所に氣が付きなつた。私もさう思ひます。そんなら今年の内になさいよ。何だか心細さうにお見えなさるから。」

と言つて其翌日から支度にかゝつた。八月の頃にしようといふので、經を寫させ、佛像師をよばせて、皆唯孝行を主として二人とも心を入れてやつた。國々から絹糸、金銀の類を取り寄せた。何でも不足なことはなかつた。

其うちに俄に天皇陛下御不例に渡らせられ御讓位遊ばして、皇太子が位に即かせられた。此皇太子は衛門の督の御妹の女御のお腹に出來た第一の皇子でいらつしやつた。其弟の第二の皇子が春宮とならせられた。御母の女御は皇太后となつた。衛門の督は大納言になつた。中納言には三の姫の舊の夫、參議には大納言の弟の中將がなつた。總て此人の一族だ

けが昇進して、誠に目出度、此人の思ふまゝになる代となつた。陛下の大納言を御寵愛なさることは格別であつた。這麼で舅の中納言は大得意で嬉しいと思つてゐた。

七月の中は朝廷の公事が急がしくて暇が無かつたが、此八講の準備は怠らずにした。八月二十一日と期日を定めた。三條邸にて舉行しようと思へたが、繼母や姫君達が容易に來まいと思つて中納言邸へ行つて行ふことに定めて、中納言の邸を種々修繕し砂を敷かせた。御簾、疊なども新しいのを用意させた。

二の姫の夫の左少辨だの、越前守だのも大納言邸の家扶を兼任してゐるので、此等の人々を此八講の世話掛に任命して事務を執らせた。本殿の建具類を取り拂ひ、いろ／＼設備して大納言の居間は北の廂間と定めた。若君や奥方の居間としては塗籠の西の端を指定した。愈明日八講を始めるといふので、前夜に中納言邸へ引移つた。場所が狭からうと女中どもは大抵残して置いて車六七輛に分乗して行つた。此度こそ繼母とも姫君とも對面した。落窪は濃い紅の綾の襦、女郎花色の細長を着てゐた。色合は勿論實に立派な衣装なので、あの縫物の褒美として貰つた着古しの着物のことなどを思ひ出す人もあるだらう。落窪の君は三四の姫など、忙しい中で色々物語つた。昔落窪に入れられてゐた時も生々しい美しい

人と思つたが、今になつては重々しい所も添はり奥方らしく大人びて、様子が格別立派で三四の姫達の着物が特に劣つて見える。中納言の奥方はもう何とも仕様がないと諦めて色々落窪の君と語つた。

『まだ貴女が小さい時分に私の所へ引取つたので自分の子のやうに思つてゐましたが、私の性質が氣が短くて考もなく腹立ちまぎれに言ふこともありますが、そんなことを恨んでいもゐられはしないかと誠にお氣の毒に思ひます。』

こいふと、落窪は内心可笑しく思ひながら、

『どうしまして決して氣にかけることなどがございませぬのですか。唯怎うかして私の心が届きますやうにとそればかり祈つてをりました。』

と言ふと奥方

『それは嬉しいございます。碌な子供も居りませぬ、思ふやうな譯に行かないで困つて居りましたが、貴女が斯うしてお在でなさるのを誰も皆喜んで居ります。』

と言つた。

翌朝は早くから八講が始まつた。上達部などが澤山に來會した。況んや四位五位の者は

更に多勢來た。「今迄勢力もなく尾羽打枯らしてゐた中納言は怎うして斯麼に羽振りのよい人を聲にしたのだらう。本當に仕合な人だ」など、驚き呆れつゝ、噂をしあつてゐた。聲の大納言はまだ二十歳餘で格別綺麗に着飾つて重々しく式場に入入して指圖をしてゐるので、これを見て中納言は得意で嬉しくて、老人の常として涙を落して喜んでゐた。大納言の弟の宰相の中將、三の姫の前の夫の中納言など立派に着装つて列席した。三の姫は前の夫の中納言を見ると縁の切れない前のことが思ひ出されて辛いので、よく注意して見ると装束を始めとして凡て美しい風をしてゐるから悲しく思つた。自分があの人に捨てられないなら、あの人もあんなに出世して大納言と同列に歩くやうなことはあるまい。さうすれば却て自分の身と不釣合でなくて嘸よいだらう」など、心中に思ふにつけても、自分の身の上が悲しくて、忍びつゝ泣いて、

『思ひ出づやと見れば人はつれなくて心弱きはわが身なりけり。』
と獨言した。

式が始まつた。阿闍梨だの律師だのといふ高僧連が多く集まつて、有難い尊いお經を上げて、一日一卷の割で九卷を讀み始めた。之は法華經七卷に無量壽經一卷、阿彌陀經一卷を加

へたのであつた。又一日に佛像一體づゝを供養しようと定めて、佛像九體を作り、經九卷を寫させた。講座の立派などは限りがない。九卷中の四卷だけは種々色紙に金粉銀粉をまかせて書かせ、軸には眞黒な香の高い沈といふ木を使い、金で縁を取つた經箱に一卷づゝ入れた。残りの五卷は紺紙に金泥で書いて軸には水晶を用ゐ、蒔繪の箱に入れ、其蒔繪には經文中のよい句の意味を模様にしてあつた。此お經だの佛像だのを見ただけでも尋常の御利益ではあるまいと思はれた。朝座夕座の講師の僧に鼠色の袷を引出物とした。凡て不足な點なく充分にと思つてした。日數がたつにつれて講筵の有難さも加はるので終の頃になると、一般の人も上達部連も澤山に詣るやうになつた。殊に五卷目の提婆品を佛に供物をして講ずる日は、貴顯の人たちを始めとして各方面に案内状を出したので、非常に多勢集まつた。供物も兼ねて用意してあつた。袈裟とか珠數とかのやうなものは澤山に集つてゐたからそれを取つて供へようとしてゐると、父の左大臣からの手紙が大納言に當てゝ來た。開いて見ると、

『せめて今日こそは參詣致さんと存じ居りしも脚氣の氣味にて装束つけること苦しければ參りかね候。此品はしるしばかりながらお供へ下され度候。』

とあつた。青い瑠璃の壺に、金で作つた橋を入れて青い袋に納めてそれを五葉松の枝につけてあつた。左大臣の奥方からは落窪の君の所へ手紙があつた。

『いろいろお支度にてお忙しき由は兼ねて承り居り候へども、何ともお話しなかりし故心一つにお手傳ひ申すことも出来ず残念に存じ上げまゐらせ候。此品はお供へ物としては眞面目にすぎるやうに候へども、これを差上げるも未來往生の縁を結ぶ爲に候、其こと一筆申上まゐらせ候。』

とあつた。其供物といふのは唐の羅ヨシモノの黄ばみかゝた赤色の段だら染になつてゐる着物一領に、實に美しい緋まきの糸五巻ばかりづゝを女郎花につけてあつた。これは珠数の緒に見立てたのであらう。其返書をかいてゐると、中納言様からといつて妹の二の姫の手紙が來た。披ひらいて見ると

『有難き八講とやら思召し立ち遊ばされしに、何ともお知らせ下さらざりしは嬉しき功德のうちに加へ給はじとのお積りにやと恨めしくぞんじ上げまゐらせ候』

とあつた。金で蓮の花の開いた形を一枝作つて、少し青く彩色して葉に形どつた上に銀の玉を露にして宿らせてあつた。

又中宮からといつて中宮の典侍が御使者としてお手紙を持つて來た。これには格別の接待をしてあまり見通されない所に坐を設け越前守と、それから前に大夫と言つた人で今度此大納言の幹旋で左衛門の佐となつた人などが盃を執つて饗應の役に出た。中宮のお手紙には

『今日はお取込みの由に承り候へば何事も申上げず候。此品は往生の結縁の爲にお供へ致候』

とあつた。金の珠數箱に菩提樹の珠數を入れてあつた。兄弟を始めとして多くの人が見てゐる中で、夫の身うちの高貴な人から心を用ゐて争つて供物をしてくれるのは、落窪にとつては非常な幸福と思はれた。中宮への返書を先づ大納言から送つた。

『お仰せの趣誠に恐縮仕り候。今日の佛事には中宮様からのお供物は私自身お供へ致すべく候。厚く御禮申上奉り候。萬事は此式終了の上にて自身參内重ねて御禮申上ぐべく候。』

御使には綾の單衣かきまぬ、袴、朽葉色の唐衣かたぎぬ、羅ヨシモノのかさねの裳などを引出物にした。儀式が始まつて上達部の君だちも皆各自供物を佛の御前に捧げて巡つた。金銀の蓮の花の開いたの

を多くの人が供物とした。二の姫の夫の中納言のばかりが銀で筆の形を作つて焼軸のやうにいふして彩色し、是を羅らに包んで透かして見えるやうにしてあつた。着物の箱や袈裟のやうなものは數も知れぬ程澤山に積み重ねてあつた。又此日經文に因よんで昔行基の作つた「法華經をわが得しことは薪とり菜つみ水くみ仕へてぞ得し」といふ歌を歌ふ常例によつて薪を飾物にすることであつたが、其薪には蘇枋の木を割つて少し色を黒くして、組紐くみひもで結つてあつた。連日の供養中今日が特に莫大な費用を要したらうと思はれた。高貴なる上達部等が供物を持つて佛前を巡つたのを見た人は皆、實に非常な老後の幸福ある人だなといつて中納言を羨んだ。

『矢張美しい娘を神佛に願かけてでも持たなくてはなりませんね。』
など、言ひ合つてゐた。斯くして九日間の法筵も壯麗のかぎり盡して爲し果てた。

三の姫は、今は大納言の義弟として中納言となつてゐる前の夫から何とか挨拶があるかと思つて「今日こそは、今日こそは」と待つてゐたが法會の終る迄何とも音信もなかつた。非常に残念がつた三の姫の魂が行つて誘つたのであらうか、中納言は法事が済んで退出する時に暫らく立止つて、左衛門の佐のゐたのを呼んで、

『怎うして汝なまはそんなによそ／＼しくするのか。』

といふと、佐は

『何だつて貴方様とお親しく致しませうに。』

と答へると、

『昔のことは忘れたのですか。近頃は怎うして暮してお在おでなさるか。』

『どなたのことですか。』

『さあ誰と言つたものだらう。あの時分は三の姫と言つてゐたが。』

『存じません。そんなお方は多分お在おででムいませうよ。』

『そのお方に斯う言つて上げてくれ。』

いにしへにたがはぬ君が宿見れば戀しきこともかはらざりけり

と此世の中は思はれます。』

と中納言が言つて去つたので、佐は「三の姫様の御返事でも聞かうと思ひなさるのが當然だのに本當に薄情なお方だ」と思つた。奥へ入つて斯様斯様に仰つてお歸りになりましたと語ると、三の姫は「暫らくでも立つ止つて下さるべきなのに。慙なまじに何だつて訪まれて下さ

つたのだらう。忌々しい。と心中に思つたが返事すべきことでもないので此儘にしてやめた。

大納言は精進落のことなどを壮大に花々しくやつて三條邸へ歸ることになつた。で中納言の方では尙一二日丈でもと止めたが、

『狭い所に大勢入つて、子供などにも便利が悪いから、今度此子供等を置いて参りませう。』

と強ひて家族どもを連れて歸つたので、中納言は

『八講の法會が有難く身に沁みて嬉しかつたことは言ふ迄ありません。中宮様や左大臣殿を始めとして親切に自分の爲に佛へお供物をして下さつたのを見まして命が延びるやうで、老後の名譽など、言ふも愚なことでもういます。此私の爲にはお經を一巻供養して下さるのでも實に嬉しうみますのに這麼大袈裟なことをして下さつて……』

と泣く／＼喜んだ。落窪は言ふ迄もなく、大納言も法事をしてあげた甲斐があると思つた。

中納言は

『これは私が大切に、誰にやらうかと年來祕藏して置いたので、御義弟の中納言が

娘の三の姫に通つて來られる頃所望したのでしたが譲らないで置きました。それといふのも貴君の物になる筈だつたからでういませう。それを貴君に差し上げませう。』

と立派な錦の袋に入れて上げた。若君は幼少ながら良い品だと見知つたらしい顔をして笑ひながら受取つた。立派な笛だと思つたのである。音もなか／＼佳かつた。扱夜更けてから一同三條邸へ歸つた。大納言は

『中納言は實に喜びなかつたものだ。又何かして見せて上げよう。』
と言つた。

斯うしてゐるうちに父の左大臣は

『年取つて行くにつれて衛府のやうな武官は私にはやつて行けない。花やかな若い男の職に適當してゐる。』

と言つて兼任してゐた大將の官を子息の大納言に譲つた。萬事思ふ通りになる世の中であるから、誰も是を妨げるものはない。大納言は大將を兼ねていよ／＼と權勢が添つて來た。舅の中納言は益嬉しがつた。左程の大病といふではないが起臥に差支へるのを大將の奥方は歎いて、あんなに嬉んびなかつたのだから、もう少し孝行がしてあげたいと思つて今暫

らくでも存命してゐられるやうに祈つた。

大納言は中納言が今年七十だと聞いて

「餘命が永くつて今後又出来るといふ人ならば緩々氣長に構へてゐるやうが、中納言は已に高齢であるから、何時とも分らない壽命だ。世間の人は此間の法事とあまり立て續けのやうに思ふかも知れないが、兎も角も七十の賀をやらう。私がやらうと思つてゐることを残らずやつてしまはう。いちめる丈は随分何度もいちめたのだから嬉しいと思ふことも唯一度ぎりて止めて置いては氣が濟まない。死んで了つた後で何をして上げてても賞めても喜んでもくれない。此度きりのことだから力の及ぶかぎりやらう。」

と思ひ立つて支度をした。諸國の國守等も唯大納言の意志を迎へて仕へ、怎うかして氣に入らうと思つてゐるから、各國守に一品づゝ割り當て、饗應の準備を命じた所が極めて容易に整つた。舊の帯刀は衛門尉から出世して五位に叙せられ三河守となつたので、此邸の女中頭をしてゐる妻の衛門は七日間の暇を貰つて任國へ同伴して往つた。落窪の君は饒別として旅行用の諸道具、銀製の銃一組、裝束の類を初めとして總て一々揃へて三河へ下してやつた。又三河守の許へも大納言から使者を急がせて舅中納言の七十の賀をするから絹を少

しと言つてやつた。早速國守は大納言の所へ絹百匹を献上し妻の衛門は奥方の所へ黄色に染めた絹を三十匹奉つた。宴會の席へ出る舞姫をもあれこれを選んで言付けた。諸道具類は出来る丈立派にした。それ等には黄金ばかりを多く用ゐた。父の左大臣は

「怎うしてそんなに立てつゝけに仰々しいことをするのか。」

と言つたが、又

「しかし又あの中納言も永いことはあるまい。生きてゐる内に嬉しがらせるがよい。あの子のことは及ばずながら私が世話をしよう。」

と言つて大納言と共に準備をした。この大納言を非常に可愛がつてゐるので、其熱心にすることだから自分も亦斯様に一緒になつてやるのであつた。賀筵は十一月十一日に行はれた。此度は三條なる自邸へ源中納言の一族を盡く招待してやつたのだ。詳細のことは煩さから此處には書かぬ。何しろ例によつて唯壯麗なものであつた。澤山に立てならべた新調の屏風など書くべきことは多いが略す。端に立てゝあつた一枚のを一寸申譯けにて書い見よう。正月のことを書いて、左の歌が添へてやる

朝ばらけ霞みて見ゆるよしの山春や夜のまに越えて來ぬらむ。

二月の部には櫻の散るのを仰いで人が立てゐる、

さくら花散るてふことは今年より忘れてにはへ千代のためしに。

三月三日、桃の花の咲いてゐるのを人が折つてゐる、

三千とせになるてふ桃の花さけり折りてかゝさん君がたぐひに。

四月

時鳥待ちつるよひの忍び音はまどろまねどもおどろかれけり。

五月、菖蒲を軒にさした家にはとゞぎすが鳴いてゐる繪

聲立て、今しも鳴くはほととぎすあやめしるべきつまやなるらむ。

六月、大祓をしてゐる所、

みそぎする川瀬の底の清ければ千年のかけをうつしてぞ見る。

七月七日、七夕を祭つてゐる家の書

雲もなくそら澄みわたる天の川今やひこほし舟渡すらむ。

八月、嵯峨野へ藏人所の下司どもが草花を掘りに行つた所、

うち群れてほりに嵯峨野の女郎花つゆも心をおかでひかれよ。

九月、白菊の多く咲いた家を見つてゐる書、

時ならぬ雪とや人の思ふらむまがきに咲けるしらぎくの花。

十月、紅葉が綺麗に色づいてゐる中を歩いてゐると散りかゝつて來るので仰いで梢を眺めてゐる所、

旅人のこゝに手向くるぬさなれや秋すぎて散る山のもみぢば。

十一月

(上旬) 脱) よろづ代をへて君につかへむ。

十二月、山中の雪が高く積つてゐる家で女が外を眺めてゐる、

雪ふかくつもりてのちは山里にふりはへて來る人のなきかな。

とあつた。又御杖の歌は

八十坂を越えよときれる杖なればつきてをのぼれ位山にも。

などゝあつた。

廣い面白い池の、鏡のやうな水面に、龍頭鶴首の船を浮べて樂人などが乗つて舞樂をやつてゐたのは面白い見物であつた。上達部、殿上人は坐りきれない程澤山に列席した。左

大臣も来た。さうして來會者にくれる装束を澤山に寄附した。中宮からも大褂うちかぶ十襲かき義弟の中納言からも装束十襲、色々のを取り揃へてよこした。中宮附の女中や女藏人のやうな人も今日の賀庭を見物しようと思つて御所を退出して集つて來た。舅の中納言は平素の病氣も忽ち平癒して目出たいことであつた。終日遊び暮らして宴終つてから深更になつて人々歸宅した。夫等に一々装束をやつた。高貴な人には其上に何か品を添へて贈物とした。左大臣は中納言に駿馬を二頭と、名品として隠れない箒を二面贈つた。供の人々には地位によつて順々に装束だの巻絹だのをやつた。越前守に

『お前は長子だからこの事だけは自分の思ふやうに取り計ひなさい。』
 と言つて大納言が任せたので、依姑最負のないように、うまく分配した。中納言方の家族の人を二三日間滞在させて置いてから歸した。落窪の君は斯うして大納言が叮嚀ていれいにしてくれることを感謝した。大納言も亦骨折つて祝をした甲斐があると思つた。

四の巻

斯うしてゐるうちに中納言の病氣が漸く重くなつて來たので、聶の大將は心配して平癒の祈禱を諸所の神佛で行つた。中納言は

『なあに。もう何も思ひ置くこともない身からだだから命が惜しいことは無い。お祈りなんて面倒なことは止して下さればよいに。』

と言つて居た。段々衰弱して來ると、

『いよく死期が近づいたと見える。命は惜しくないがもう少し生きて居たいやうな氣もする。私が年來不遇のうちに日を送つて、まだつひ近頃任官したばかりの若い人達に追ひ越されて遅れてゐるのを恥辱と思つてゐた。大將があれ程親切にして下さるから生きてさへ居れば大納言になれるだらうが、今斯うして死ぬのは矢張中納言以上に立身出來ないやうな前世からの約束と見える。是れ丈が不足に思はれるが其外には老後の面目臨終の榮譽、私以上の人は恐らくあるまいと思つて居る。』
 と言つたのを大將が聞いて非常に氣の毒がつた。落窪の君が、

『何卒大納言にしてあげたいものです。一日でもよいからさうしてあげて何一つ不足ないと思はせて上げたく思います。』

といふのを聞いて、大將はさうしようとは思つたが定員外にするといふ譯にも行かず、と言つて人の官を剃ぐことも勿論出来ない。結局自分のを譲らうと思ひ付いて父の左大臣の所へ行つて、自分の心中を語り、

『かう思ひますが、私の子供等も澤山居りますけれど、彼等が出世してお爺さんを喜ばせる迄も、中納言は兎ても壽命がありませんから、其かはりに今、私の大納言を譲らうと思ひます。どうぞよろしくお取計ひを願ひます。』

といふと、

『さう汝が思ふなら遠慮もなにもいらぬ。早く其旨を奏上しなさい。汝は大納言の官は無くても大將丈でよからう。』

と左大臣は何でも自分の心次第になる世だからと思つて、斯う答へたので、大將は非常に喜んだ。早速奏上すると、中納言を大納言に任する旨の勅を下された。これを聞いて大納言に病床にあつて喜ぶこと限りなかつた。這麼に親を喜ばしたのは落窪の君にとつては定

めて來世の大功德であらうと思はれた。

大納言は此喜びに氣分が引立つて床から起き上り、人を遣して所々の神佛に願を立てさせた。定まつた壽命もどうぞ延びるやうにと人をも遣つたり又自分でも祈つた爲であらうか、少し快くなつて元氣恢復して起きて居る。參内する吉日を人に見させ、あれ是と處置すべきことを人々に割り當て指圖をしながらも、

『私の子は七人あるが、これ程に現世にも未來の爲にも嬉しい思ひをさせたのが一人もあるか。這麼大事な娘を少しでも疎かに取扱つたのは、私が不幸な目に遭はうとのことだつた。娘等二三人は聲を貰つたが今でも皆私の厄介になつてゐるぢやないか。加之非道い恥までもかゝせた奴がある。あの大將は私から毛程でもお世話したことはないが、いろ／＼格別に面倒を見て下さるから却て恥しいやうな氣がする。私が死んだら私の代りに男でも女でも誰でも皆よく大將に従はなければならぬぞ。』

と眞面目で言つてゐた。で奥方は心中憎らしく早く死んで了へと思つてゐた。參内の當日となつて大納言は立派に裝束を付けて、先づ大將邸に行つた。夫婦一所に揃つて坐つてゐたので其前へ行つて拜むと、

『それは勿體ない。』

と大將が制する、

『私は朝廷だとして有難いとも思ひません。唯貴方のことを有難く思ひます。此世で御恩返しが出来ないで死にましても、いつでも貴方の影身に添つてお護りしようと思つて居ります。』

と言つた。それから退出して今度は左大臣の邸へ行つて、次に内裏へ参つた。祝として人々に種々装束などをやつたことは前の賀の祝の時と同じやうで盛であつたが、管々しいから此處には書かぬ。

扱大納言は其日から又病床に横はる躰となつて、段々重くなつて苦しがつた。

『今は塵程も思ひ遣すことはないから死んでも命は惜しくない。』

と言つて臥てゐた。愈衰弱せられたと聞いて大將の奥方は大納言邸へ見舞に來られた。大納言は有難く嬉しいと思つた。姫君達も五人枕もとに集り、看護して心配してゐた。大納言は他の子供達が介抱してくれるのは嬉しいとも何とも思はないで、唯大將の北の方が側に付添つてゐると嬉しがつて食事もした。湯漬飯を食べた。

愈危篤となつたので、大納言は

『生きてゐる内に財産の處分をしよう。子供等の様子を見ると兄弟も仲よくないし、姉妹の間柄も疎々しいやうだから、私が死んだ後では屹度争ひが起るだらう。』

と越前守を前に呼んで坐らせて、所々にある領地の證書、束帯に用ゐる石帯などを取り出して選り分けた。少しでも宜いものは皆大將の北の方に譲るやうにして、

『他の子供等は少しでも羨しいと思つてはならない。同じやうに力を盡して親に孝行をしても親からは少しでも地位の上の子に善い物と與へるのが世の慣習だ。況んや汝等は孝行することも出来ずに永年私の厄介になつてゐたのだから、それ丈でも有り難いと思ひな。』

と鹿爪らしく言ふのを子供達は道理だと思つた。

『この家も古くはなつてゐるが廣くてよい所です。』

とて大將の北の方に譲つたので奥方はそれを聞いて泣いた。

『理窟からはさうも仰れるでせうが、私は怎うして平氣で黙つて居られませう。永年若い時からお連れ添ひ申して六七十にもなる迄お世話をし、貴方だけを此上なくおたより

申して居りました。二人の間に子どもは男女合せて七人持ちました。何故この家を私に下さいませんか。子供等のことは孝行しなかつたと言つてお見限りなさいませうが、併し世間の親たちは不仕合な子を自身の死んだ後では怎うなるかと特別に心配するものです。大將殿では此家なぞはお貰ひにならなくても差支はありますまい。大將様も御親切なお方であるし、立派なお屋敷も三棟にも四棟にもお心次第に作る事が出来ませう。三條の屋敷も彼廩に玉のやうに作つて差上げました。男の子は家が無くつても構ひませんが、夫のある一の姫と二の姫は碌な家も持つて居りません。しかし、それは夫のあることですから、まあどうにかなるものとして、私と三の姫四の姫とは此處を立ち除けと言はれたら何處に住んで居られませう。大道にでも立つて居れと仰るのですか。そんな譯のわからないことを仰いますな。』

と言ひ續けて泣いた。大納言、

『子供等を見捨てるといふのではないが、立派な家ではなくとも決して大道に立たせるやうなことはしない。貴女の永年子供を育て、くれた骨折に對して子供等は充分な孝行を盡すだらう。越前、汝は私の分まで一緒にしてお母様を大事にしてあげなさい。三條

の家はもと／＼私のものでなく元來あの人のものなのだ。大將殿にも、少しは整然とした物を上げないで死んだらば臍甲斐ない男だと思はれるだらう。何と言つたつて此家を汝にあげるわけには行かない。何時か分らない命だのに恨みごととは言つてくれるな。苦しいから口をきかせないでくれ。』

といふと、奥方は又々言ひ出したが、子供等が集つて制して言はせない。大將の北の方はこれを聞いて氣の毒と思つて、

『奥方の仰ることは御尤でムいます。私には何も下さいますな。お子様方にすつかりお上げ下さいまし。其の上此屋敷に誰様も住み馴れてゐらつしやるのに、あんまりな所にお引き移り遊ばすのは誠に見つともなうムいます。どうぞ早く奥方にこれをお上げなさいまし。』

と責めてたので、大納言、

『私はやるわけにはゆかない。私が死んだ後で怎うにでも汝の考へ通りになさい。』
と言つて一向聞き入れない。よい石帯などが稀に残つてゐたのも皆大將殿へ差上げた。越前守は心中少し不満であつたが、親の氣に入つた人のことを彼是といふべきではないから

口にも出さなかつた。大納言は處分すべきことをすつかり取許らつて了つたが大將の北の方を何につけても嬉しいと思つて

『お蔭様で仕合な目にあひました。』

と繰返し繰返し言つて、

『碌でもない女の子が澤山あります。あれをよくお世話下さい。』

と言つた。

『承知致しました。私の力の及ぶかぎりはどんなにでもしてお世話申しませう。』

答へると、

『それは何より嬉しいことです。』

と言つて、娘等に向つては、

『汝等は此お方のお言葉に従ひなさい。主人と思つて。』

と眞面目に言つてゐる内に愈危篤になつたので、誰も皆非常に悲しがつた。遂々七日に死んで了つた。それは十一月のことであつた。あまり惜しいといふ程の年齢でもなく、死ぬのは定命だとは思ひながら子供や、女、男が集つて惜み嘆く様子は哀れなことであつた。

大將は子供と一緒に三條邸に遺つてゐたが、毎日大納言邸の門口まで来て穢を忌んで内には入らず立つたまゝで泣き悲しみ、又葬式の世話などもした。が、猶あきたらず自分で邸内に入つて指圖をしようとしたので、父の左大臣、

『新しい帝が御位にお即きになつてから間も無いのに、忌みがかつて長々と出仕が出来ないやうになつては不都合だ。』

と切に止めた。北の方も

『幼い子供等を此處へ呼びましては物忌などをするのに大變でムいます。あちらへ遺して置きまして貴方がゐらつしやらなくては氣懸りでムいます。どうぞ忌引などはなさいますな。』

と言つたので、大將は爲方なく三條の自邸で馴れない一人住ひに子供等の相手をして、淋しく暮してゐた。這麼に大納言が早く死んだのを見るにつけてもよくも思ふことを急いでしたものだと思ひ嬉しがつた。

大納言邸では日を選んで死後三日目に葬式をした。大將からの送り人として四位五位の人が澤山に葬列に加はつた。實に大納言自ら言つたやうに非常に死榮えがした人だと世間

で評し合つた。

忌中は子供達は皆假りに立てた低い喪屋に引移つて本殿には僧侶等が多く籠つてゐた。大將は一日でも訪れぬことはなかつた。立つたまゝで日々に對面して色々指圖をした。北の方は濃い色の喪服を着て精進のせい少し青んでゐる顔を見て可愛さうになつて大將は嘆いて、

『なみだ川我なみださへ落ちそひて君がたもとぞふちと見えける。』

といふと、女君

『袖朽すなみだの川の深ければふちの衣といふにぞありける。』

などと言つた。こんな風で大將は絶えず往復してゐるうちに三十日の忌も果てた。

『もう三條の邸へお歸りなさい。子ども等も戀ひしがつてゐるから、』

といふと、

『後幾何でもありませんから四十九日が済みましてから歸りませう。』

と女君が答へるので、大將は此邸に夜は來ることにした。

さうかうする内に間もなく四十九日になつた。法事は此大納言邸でした。此度こそは最

終の法事だからとて、大將は非常に盛大に行つた。大納言の子等も我もくゝと身分に應じて力を合せて行つたので實に仰山な立派な法事であつた。式が済んだので、大將は

『もう歸りなさい。歸らないなら納戸へでも押籠めようか。』

といふと、北の方

『飛んでもない。もう申談にもそんなことを仰いますな。奥方などがお聞になつて前のことを忘れないのだなと思召したら、それが基となつて隔意が出来るでせう。亡くなつた父上様の代りに母様を親切にして下さるやうに願ひ致します。』

大將

『勿論です。姫君達のこと貴方が親切にして慰めておやりなさい。』

など、語つた。

越前守は大將の北の方等が三條の屋敷へ歸ると聞いて、故大納言が臨終に際して、大將夫婦に與へよと命じて、整理して置いた所々の領地の證書類を取り出して、持つて來て、『つまらないものですが、亡父が遺言致して置きましたのですから。』

と言つて呈した。大將はそれを見ると、石帯三着、其内の一つは自分が曾て贈つたもので

ある。他の二つは其に比較して見ると流石に劣つてゐた。又領地の證書や家の圖などがあつた。大將

「なか／＼よい所々を領してゐらつしやつたものだ。この家は何故姫君か奥方のうちにお上げにならなかつたのだらう。それとも別に屋敷があるのですか。」

といふと、北の方、

「いえ、ムいませぬ。此處は這うして皆様が久しくお住み馴れ遊ばした所ですから私は戴きますまい。奥方に差上げようと思ひます。」

といふと、大將、

「それはよい考です。貴女は是をお貰ひなさらんでも、私が付いて居るから差支はありますまい。是を貰つては皆の恨を買ふやうなものです。」

と語り合つて、越前守を近く喚び寄せて

「貴方は委細承知しておいでせうが、一體怎うして私等にはかりこんなに澤山贈られたのですか。私の家を權勢があると思つて畑たがつてのことですか。」

と笑ふと、

「決してさうではムいませぬ。臨終の時に一々指圖して私に預けて置かれたのでムいませぬ。」

「それはよくも行き届いたものです。併し此女が「此家には誰方も住み馴れてゐらつしやるのに怎して頂戴しよう」と言ひますから奥方が此處はお持ちなさるがよいです。」

この帶二つは衛門の佐と貴方とに一つづゝあげます。私の方には美濃にある領地の證書と石帯一着丈を頂いて置きました。あまり辭退しても折角左様してお置きなされたお志に背きますから……」

越前守

「それは飛んでもないことでムいませぬ。亡父が自分で指圖をして置かなかつたにしても遺産は貴方様が御支配なさるべき筈でムいませぬ。まして父が自分で斯うして置くぞと言致しましたのに背きましては、濟みませぬ。誰も皆少しづゝは分配を受けて居りますのですから。」

と受取らないので、大將、

「わからないことを言ふものです。私の言ふことが道理に外れてでもゐるならばです

が、さうで無いのだから私の言に従ひなさい。斯う分配してあるからは此女が戴いたのも同じことです。此女は私が生きてゐる以上は何も不自由はありませんまい。それに、いくらも子供が生れたから行末のことも安心です。以前から三の姫と四の姫とは據の人も少いやうでゐらつしやるから私がどんなにもお世話をしようと思ふ。其姫達の貰つた物に添へてお上げなさい。他の二人の姫たちには其夫の君に私から何か上げませう。』

『兎も角も此旨を傳へて参りませう。』

といつて座を立つと、

『若し返したりなどしても受取なさるな。同じことばかりを繰返してゐるのは面倒です。』
といつた。

『石帯は矢張他の人にお遣りになるか、又は御自分でお用なさいまし。』

と越前守が言ふと、

『そのうち入用がある時にはさうしませう。親戚の間柄だから其時に怎うにでもなりま
す。』

と言つて無理に受取らせた。

越前守は奥方や姫達に大將が言はれたことを語ると、奥方

『此家は本當に惜しかつたのだから、さう仰つて下されば嬉しい。』

と言つたが、それでも元來自分の物なのを落窪の手から貰ふのだなと思ふと残念なので、

『落窪の君がさう取計ふのだらう。忌々しいことだ。』

と言ふので越前守はむか腹を立て、爪弾きをして

『未だそんなことを仰るのですか。前にはあの北の方に對して氣の毒な恥しいことをして實に私は面目ない心持ちがするのにも、又そんなとは人として言はれることではありません。私を困らせようと云ふお考へですか。貴女が悪意を持つて入らつしやつた間は非常な恥をかゝせられたではありませんか。今はそれに引返へて是程丁寧にして下さるのに、其御恩さへも少しも思はないでさういふことを仰しやる。昔は一體どんな非道いことをなさつて居たのだらう。落窪だの何窪だのと人聞きも悪いし私も聞きづらい。』

と言ふと、奥方

『何程の恩を私は受けたらう。大納言のことは父だから大事にしたのだ。又間違つて落

窪と言つたつて何が悪いことがあるものか。』

越前守、

『なさないお心ですね。物の道理がお分りにならないのです。恩を受けないと仰つしやるのは直接に御自分に何も貰はないと思ひなされるのでせう。然し大夫が左衛門の佐になつたのは誰のお蔭ですか。私がおの屋敷の家令になつて昇進したのは誰がして下さつたのですか。其内に見ていらつしやい。私達が人間らしく出世するのは唯あのお方の御蔭です。第一母様は家もお貰ひにならなかつたのに若し此家を大將の方でお取りになつたなら今から何處にお住ひなさいますか。よく／＼お考へなさいまし。こんなことをお考へになつたら嬉しく思召しませんか。私も國守になつてゐて収入もありましたが、妻のことを大事にはしても妻の母に迄は何もやりませんでした。加之現在の母でありながら母さんに誰も何も上げないのは子供の志が薄いからです。自分の生んだ子ですらもこんなに疎略にして孝行しないのに大將があつして下さる御親切なお心を泣いてお喜びになる筈です。』

と言つて細々語り聞かせると尤だと思つて奥方は黙つて居る。越前守

『御返事は何としませうか。』

と言ふと、奥方

『知りません。私は何でも物を言ふと僻んで居るつて喧ましく言ふから外聞がわるい。よく物の道理の分つて居る人は何とでもうまく言つておやりなさい。』

『人の爲めに言ふのではありません。母様の爲めです。大將殿が三の姫四の姫母様などをどんなにでも世話をし上げてようと仰つしやるのは彼方の奥方のお心に従つてなされるのです。ですからあの奥方は同じ腹の兄弟姉妹としてもあれ程實のある人はありません。』と恥しめられて奥方、

『大將殿が三の姫四の姫に領地を下さるさうですが、私は怎うするか心配です。私が大納言から貰つた丹波の庄は年に米が一斗も取れる處ではありません。まう一つのは越中で實に不便至極な處です。辨の殿が貰つたのは三百石も上る處です。あんな遠くつて悪い處を汝が選つて私にくれたのね。』

と甚く喰つてかゝつたが、誰も皆大納言がして置かれたのを見て居るのだから、

『さう仰いますな。互に親切にして助け合ふべき筈の人ですらもさう云ふさもしい心を

持つて居るのですから、大將様の北の方の御親切が其れで分りませう。』

と言ふと、奥方

『嗚呼喧ましい。さう非道く私を言ひ込めなさるな。皆が貧乏だからそんなことを言ふのでせう。』

と言つて居る時に左衛門の佐が丁度其處へ来て、

『性質のよい人は失意の時や貧窮の場合でも別段に操を守つて見上げたものです。大將様の北の方が此處にお在でなつた時は一言でも不平らしいことを仰いましたか。少しもそんなことを聞いたことも有りません。お母さんが非道いことを仰つても、あのお方は物やさしく従つて居られて逆ひもせず、ゆつたりとして居られ又自身でもやさしい物言ひをして居られて一度も角々しい言葉を遣はれたを聞いたことはありません。』

と言ふと、奥方、

『どうかして私は死んで了ひたいものだ。皆が私を憎んで悪物にして丁ふから、生きてゐたら罪になるかも知れない。』

と言ふので、

『あゝ恐れ入りました。よし／＼、もう大將殿へは何とも御返事は申上げますまい。』
と二人共續いて立つと、流石に

『まあ、まあ、此御返事は申し上げなさい。』

と呼んだが聞かぬふりをして去つて了つた。

左衛門の佐、

『どうしてあんな悪い親を持つたのでせう。何とかしてお心がなをる様にお祈りでも、ませう。こんな風では私等の爲めにも大變なことになります。』

と言つて御返事は二人共に相談して大將殿へ。

『仰せの趣長く承知致しました。私共にては只今と成りましては只殿お一人をおたより申上げるより外はムいませぬ。御下賜下されました領地の手形は皆々故大納言の本意に違つては悪からうなど、遠慮いたして居りますが、お志をあだに致してもどうかと存じて頂戴致して置きます。此屋敷のことは故大納言格別に心を入れて差し上げましたものですから北の方様以外の人の所有に致しましては、亡くなりました父も不都合なことを

すると存じませうと思はれまして気がかりでムいますから手形は矢張御手元に御とゞめ下さいまし。』

と言つて手形を返した。前に此の手形を越前守が取つて座を立つたので奥方は返すのだからと心配して、

『其れは何故持つて行くの。あゝ仰るのに此處へ持つて来てお置き。』

と呼び返したから「嗚呼喧かましい。大切な事だのにあんなことを言つて居られる。考のない話だ」と心中に思つた。

大將は此返事の趣を聞いて、

『貴女以外の處へ此手形が渡つたらば大納言も残念だと思ふでせう。奥方が生きていらつしやるうちは此處に住つてお在になつて、あとで三の姫四の姫におやりになつたら畢竟同じことだ。早、手形を其方へ取つてお置きなさい。』

と言つた。かくて皆三條へ引上げた。女君は

『又其うちに参りませう。彼方へも遊びにいらつしやい。亡くなつた父上の代に姫君達や母様を父上と思つて大事に致しませう。何でも遠慮なく仰い。隔なくして下さるのが

私には何より嬉しう御座います。』

など、親切に言ひ置いて歸つて行つた。

斯くて大將家からは故大納言の存命中に送つた物よりも立派なものを毎日姫達に贈り實用向きのものを奥方に上げようと夜中でも運んだから、奥方は本當に自分の子供は澤山有るけれども、男は一向物が分らず、私の爲めや兄弟姉妹の爲めに落窪が色々心配してくれるのは有難いことだと段々思ふ様になつた。

さうしてゐるうちに年も改つた。春の叙任式に左大臣は太政大臣になり、大將は左大臣に昇進した。次々の御弟なども各出世したが、是等の人々のことは書く暇が無いから省く。左大臣の北の方の幸福を世間の人々、兄弟姉妹等も賞め羨んだ。二の姫の夫の左少辨は貧窮だから収入の多い國守にならうと思つて、左大臣の北の方を據つて頼んだので、恩恵を以て美濃守にしてやつた。越前守は任期が満ちて今年が交代の期であつたが、國政を能く執つたといふので、取立て、播磨守にした。左衛門佐は少將になつた。誰も皆左大臣の恩顧によつて立身すると相集つて奥方に此度の目出度いことを話して聞かせ、

『いれでも御恩を受けませんか。これからはもう口から出放題を仰いますな。』

と言ふと、

『本當にさうです。』

と答へた。「今度の叙任式は太政大臣一家の慶び見たやうなものだ」と世間の人が評判した左大臣はかやうに心の儘に何でも取計つたので、父の太政大臣も自分が爲ようと思ふことも先づ左大臣に相談する。それについて、左大臣が「悪いでせう。お止し遊ばせ」といふと自分でしたいことでもを敢てしなかつた。又自分の心にはすまいと思ふ事も左大臣が二度重ねて言ふことは聞かない譯には行かないので、叙任式をしても高位のものは固より下々の者迄も皆左大臣の眷顧によつて任官し得たのである。天皇陛下の伯父であるから陛下も格別に大事にせられた。自分は左大臣の位にあつて學識も高く、其言ふことを抗ふ様な上達部もなく、父の太政大臣も同じ子のうちながら格別此人を鍾愛したあまりに、今では氣が置ける勿體ないものと思つて居た。却て子供の方が親の様な風であつた。世間の人も之を知つて太政大臣よりも左大臣殿にお仕へしよう、其方が太政大臣殿もお好きなのだ、少しでも望みを抱いて居るものは左大臣へ集り仕へないものはなく、皆華美を装つて出入りした。左大臣の北の方は美濃守に餞別として色々のものを贈つた。此屋敷の家族

中でも格別に最負して。馬だの鞍だのを準備してやつて、大將、

『こんなに叮嚀にするのは、北の方の口添へがあるからだ。かうして國へ行つて不行届の無いやうに國政を執りなさい。若し政を疎かにしてゐると聞いたら決して以後は關はなごぞ。』

と言つた。美濃守は畏つて嬉しがつて、結構な姻戚だと思つて退出後、大將の言つたことを二の姫に語つた。

『骨折つて國を治めろと仰つた所で見ると、私は恩顧を受ける身と見える。』

左大臣はまうどうかして三の姫四の姫にも相應な夫を待たせようと内々心がけたが然るべき人の無いのを残念だと平生言つてゐた。奥方始め三四の姫にも、夏冬の御衣其他の物も充分に澤山、故大納言存命中よりも以上に豊富に、位地の上るに付けて萬事を世話して何の不足もない。御子が産れたり、成人した男女に袴着の式をしたことなど暇がないから茲には書かぬ。長男は十歳で割に大柄なので、御所へ出仕しても間違はあるまい、伶俐だからと、春宮の御所へ上つた。書を讀んでも悟りが早く落付いてゐて性質も敏捷なので、

天子様は御幼少だつたから、遊び相手にお召し使ひなさつて、御寵愛遊ばして笙をお吹きになつて時々は教へて下さつた。父の左大臣は非常に是を可愛がつた。祖父の太政大臣の屋敷に養はれてゐる次男は九歳であつた。兄が殿上するのを羨ましく思つて、

『私も御所へどうかして上りたい。』

と言ふと祖父の太政大臣は可愛がつて、

『何故今迄黙つてゐたのですか。』

と急に殿上させることにしたので、父の左大臣

『まだ小供ですのに、』

と言つたが、太政大臣は、

『何にそんなことがあるものか、長男よりも伶俐だ。弟の方が勝つてゐる。』

と言ふので父左大臣は笑つた。太政大臣は宮中へ行つて、斯う奏上した。

『此兒は私が此上なく可愛がつて居ります孫でゐいます。其お積りでお愛願を願ひます。』

兄よりも御寵愛遊ばしませ。官も兄以上にして下さるやうにお願い致します。』

と又家でも

『此子を何でも總領として取扱へ。』

と平生言つて、名も弟太郎とつけた。其妹の姫は八つで實によい縹緞きりぎぬなので今から類なく大事にした。其次の妹六つ、弟は四つであつた。又近いうちに産む筈だ。こんな風であつたから左大臣が北の方を大事にしたのは至當のことである。

太政大臣は今年六十になつたので、左大臣は賀の祝をした。賀筵の有様は實に盛んであつた。唯讀者の推量に任せる。舞は孫の太郎と弟太郎とが二人でやつた。いづれも劣らず立派にやつたので、祖父の大臣は嬉涙を落しながら見てゐた。斯様に何でもなすべきことは時期を外さず厳めしくしたので、權威は益加はるばかりであつた。さうしてゐるうちに月日も忽ち移り行つて大納言の一周忌も済んだから、左大臣の北の方は喪服を脱ぐことゝなつた。皆打揃つて大納言の子供等は時めいてゐるので一周忌の法事など充分に盛大にやつた。繼母はこんなに子ども等が出世したのを皆左大臣の北の方のお蔭と喜んだ。北の方も是を嬉しく思つた。左大臣はどうかして三四の姫たちにもよい聲をとらうと思つて然るべき人もがたと心してゐると、中納言で朝廷からの命令で大宰府の帥となつて下る人が、急に妻を亡くしたのを聞いて、人柄もよい人だと思ひ付いて、宮中で遭つた時なども氣を

付けていろいろ話をして見て、よい機を見て此縁談をほめかすと、「至極ようムいます」と早速承知したので其旨約束した。左大臣は北の方に此事を語つて、

『斯様々々の人と約束をした。上達部でもあり、人品もなかくよい人です。三の姫に婚せようか、それとも四の姫にしようか。どちらがよからう。』

と言ふと、北の方は

『さあ。お心次第におきめ下さいまし。でも私は四の姫がよからうと思ひます。氣の毒なことがありましたから、氣晴しが出来るやうにさうして上げたいのです。』

といふと、

『此月末に大宰府へ下る筈だ。早くしよう。奥方にさう仰い。もし承諾しなすつたら此屋敷で結婚させよう。』

『手紙ではなかく長くなつて書き切れません。自分で行かうとしましても憶却でムいます。少將、播磨守などを呼んで委細お話し下さいまし。』

などと語り合つた。北の方は翌朝少將を呼んで密かに語つた。

『私が自分で参りましたとお話ししようと思ひますが爲かけた仕事がありまして出られま

せん。左大臣が姫の縁談のことを仰るがどうしたものでせう。「ちゃん」としてゐるやうでも獨身の女は意外なことが起るものだ。此人はよい人らしい。誰も承知の上は此屋敷へ四の姫を呼んで結婚させよう」と左大臣は仰ります。

と言ふと、少將

『それは勿體ない仰でムいます。縦令悪いことでも左大臣殿がさう仰るのを辭退すべきではありません。ましてこれは結構です。歸つて此趣を傳へませう。』

と言つて歸つて親の所へ行つて、是を語つて、

『こんなに仰いますが、誠に結構です。どういふ人であらうとも今の時めいてゐられる大臣の御娘のやうにして世話して結婚させて下さるのを、あだやおろかに思ひませうか。面白の駒のことで、随分ひどく人に笑はれ悪口をされましたのを、是で恥を雪げと斯うして下さるのだらう。年は四十餘です。故大納言が存命で心配したからとて、是程の人は見つかりませうまい。親以上親切にして下さつて、あゝもしてやらう斯うもしようと、どうにもして仕合にしてやらうと思つて下さるのは實に嬉しいことです。早速四の姫を三條のお屋敷へおやりなさい。』

といふと、奥方

『私の死んだ後で獨身でゐては心配だ。何でも國守の相當なのを聳にしようと思つてゐたのに、まして上達部でもあり、本當に嬉しい。かうして細かに世話して下さるのは見上げたお志です。あの北の方よりも殿の方が感心なお心だ。』

と言ふと、

『左大臣も北の方を大事になさるあまりに、私ども迄も愛して下さるのだといふことを時々聞きます。北の方も「私のことを愛して下さるなら、あの奥方の腹の子たちを男も女も可愛がつて上げて下さい」と大臣に仰るので、今度のやうな幸を與へて下さつたのです。つまらない私のやうなものでも、色々な女に心を移したいものですが、あの大臣は北の方より外に女はないと思つていらつしやいます。御所へおいでになつても、きまき后の室の女中だちの美しいのにも申談にも目を止めず、夜中でも明け方でも暗を辿つて歸邸せられます。女が男に大事にせらるゝ例としては、あの北の方以上のお方はありますまい。』

など、言つて

『何と思ふかと本人に聞いて御覽なさい。』

と言ふ。で、

『四の姫此方へお出でなさい。』

と呼ばせると、やつて來た。奥方はこれに縁談のことを語つて、

『斯ういふことをあの左大臣殿が仰つて下さるが、面白の駒のこと以來世間の笑ひ草となつてゐる貴女あなたには、至極結構と嬉しく思ひますが、どうですか。』

といふと、四の姫は顔を赤くして、

『それは結構でムいですが身の上知らずと世間の人に思はれませう。どうしてそんなことが出来ませう。世間の人が悪評しますのと一つには左大臣殿の恥ともなるでせう。そんなことをしては見つともないでせう。不仕合な身ですから、厄にならうと思ひますが、母上が御存命の内は、あの生んだ子を育て、お見せ申すのが切めてもの孝行と思ひまして今までかうして居ります。』

と言つて泣くので、身の辛さを深く感じたものと少將は思つて、可愛さうで涙ぐんでゐた。奥方、

『まあ、飛んでもない。何だつて厄になんぞなりなさるか。しばらくでも榮華な暮しをすれば、世間でも仕合な人だと思ふだらう。私の言葉に随ふと思つて承知なさい。』

と言つた。少將

『御返事は何と申しませうか。』

と言ふ。奥方

『この姫は斯ういふけれども自分では實に結構と思ふから、兎も角も貴方の考でよいやうに申上げて下さい。』

と言ふと、少將は「はい」と答へて座を立つた。

少將は左大臣の邸へ伺候して、事の次第を委しく語る。北の方は四の姫の言葉を不憫に思つて、

『さうも思ひなさりさうなことです、世間にはさういふ例も澤山あると思ひかへしなさるやうに。』

と言つた。大臣は是を聞いて、

『奥方さへさう思召すなら、本人は厭だと思つても早速さうしよう。あの人はよい男だ。』

「今月の末に赴任する筈だ。同じことなら早くしたいものだ」と言つてゐた。早く四の姫を此處へおよこしなさい。』

と少將に言ふ。曆を取りにやつて見ると、七日が吉日であつた。固より何の故障がある筈もない。人人の装束は此屋敷に豫め用意してあるのを着て西の對なれで式を擧げようと思つて此處を支度させた。

『四の姫早速お來でなさい。』

と左大臣の方から言つてやつたので人々早くくと急がしたが、姫は氣が進まず、嫌がつて、「今に参ります」と言つて一向支度をしないので、人々

「縦令此事でなくても左大臣様からお來でなさいと仰るからにはお行いでにならぬ譯には参りますまい。まあ強情な。』

と言つて、到頭連れて行つた。車には女中が二人と小女が一人と供としてついて行つた。面白の駒との間に生んだ娘は十二で誠に美しい。母上と一緒に行きたいやうな様子であつたが、見つともないだらうと人々が止めるのを、四の姫は悲しがつて泣いた。三條邸へ着くと左大臣は待ち受けて面會して、いろ／＼話をしたが、却て初婚よりもはしたなく恥しく思

つて、返事も碌にしない。一體此姫は左大臣の北の方からは三つ下で二十五であつた。面白の駒を十四で聳にして十五で子を産んだのであつた。此大臣の北の方は即ち今年二十八であつた。三四日の間此姫を非常に大事にせられた。七日になつて、西の對に自分と一緒に引移る。四の姫のお供の女達の着古した着物を着てゐるのには装束を一揃づゝやつた。姫附きの女中が少いので北の方附きのを小間使三人、小婢一人、下女二人よこした。其當日に各自装束をつけた風は實に立派であつた。母の奥方だの他の兄弟姉妹達も皆此西の對に集つた。日が暮れると左大臣は出たり入つたりして色々世話をした。弟の少將はこれを見て忝ないと思つた。夜が更けてから聳君の帥がやつて來た。少將が案内して西の對へ導いた。四の姫は帥の人品が立派であるし、左大臣も這處に氣をつけて世話してくれるので、成行きに従はうと決心した。二人は目出度合巻の式をあげた。様子が可愛らしいので嬉しいと思つた。二人で語つたことは聞かなくなつたから此處には書かぬ。夜が明けて帥は歸つた。

左大臣の北の方は帥が四の姫を氣に入つたかと心配すると、左大臣

『手紙を頻りによこさんでも末長く添ひ送る例はいくらもある。決してあの男は姫を疎略にするやうなことはあるまい。併し此方で堅ぐるしく氣の合はないやうな様子をす

るのはよく無いものですよ。私が貴女に文を通はし初めた時でも世間普通の戀する人のやうに甚く煩悶して我慢が出来ないといふやうな態度はしなかつたでせう。考へ出して時々手紙を上げたばかりでしたが、逢ひ初めてからは情が厚くなつて、あの儘よい加減なことをして置いたら後で唯残念だつたらうと思ひました。さういふ風に心の轉じて行くのは妙なものです。』

と語つて二人揃つて西の對へやつて來た。四の姫はまだ帳臺の内に寝てゐた。北の方が「起きなさい」と聲をかけて起してゐると帥の所から後朝の文を持つて來た。左大臣はそれを受取つて、

『早速見たいのだけれど、見られては困るやうなことも書いてあるかも知れないからよしませう。見て了つたら後では是非貸して下さい。』

と几帳の中へさし入れる。北の方はそれを取次いで渡したが、四の姫は急に手にも觸れない。

『それなら読んであげませう。』

といつて文をあけて見た。四の姫は、以前に、面白の駒の書いてよこした文を思ひ出して、

又あのやうなことではないかと胸をどきつかせてゐる。北の方が讀むのを聞くと、

『逢ふことのありその濱の眞砂をば今日君おもふ數にこそとれ
いつのまに戀の』

と書いてあつた。

『早く御返事をあげなさい。』

と北の方は催促したが、姫は答へもしない。大臣は

『その手紙を一寸見せてくれ。』

と迫めるので、北の方

『どうして其麼に御覽になりたいのですか。』

と文を差し出すと、大臣は是を讀んで、

『大層簡略な書きやうをしたものだ。』

と言つて、

『返事をお上げなさい。』

と其手紙を再び几帳の中へ差し入れた。早く／＼と硯紙を取り揃へて催促する。四の姫は

自分の返事も大臣殿が御覽なさるのだなと思ふと恥かしくて急には書けない。

『見つともない。早く／＼。』

と北の方が側から責めたので、上の空で斯うかいた。

『我ならぬ戀路も多くありそ海の濱のまさごはとりつきにけむ』

文を結んで出すと大臣、

『あゝ見たいものだ。此返事の文が見られないのは残念だ。』

と言つてゐる様子が頗る可笑しい。使には物をやつた。帥は此二十八日に船に乗る日取りであつたので、出立ももう間の無いことである。

斯様にして左大臣殿では三日目の晩の儀式を初婚の人のやうに盛大に行つた。

『女が大事にして仕へると男の心も不憫が増つて親切になるものです。ですから丁寧に世話をなさい。私が仲人した縁談ですから二人の間が疎いやうでは困ります。』

といふので北の方は、昔、左大臣が自分と逢ひ初めた時のことを思ひ出して

『あの時は何と思召したでせう。阿漕は私の恥しい姿を貴方様に見られまいと思つて心配しました。彼塵見すばらしい私でしたのに、どうして貴方様は初めから私をお愛し下

さつたのでせう。』

といふと、左大臣は會心の笑を洩して、

『それは虚言だ。』

といつて、近寄つて来て、

『落窪と言ひ立てられて苛められなさつた晩は實にいつもに増して可愛く感じた。あの晩口惜しいと思つた心が全然かなひましたね。あの返報には甚く懲らしめて置いて後で嬉しがつてまご／＼する位に世話してやらうと思つたので、四の姫のともかうしてやるのだ。奥方は嬉しいと思つてゐるし、播磨守の景純などは有難いと思つてゐる様子だ。』

など、言ふと、北の方は

『奥方も嘸嬉しいと思召すことが多いでせう。』

と答へた。

日が暮れると帥は來た。祝の日なので其御供の人々にも物を授けた。四日目からは朝も遅くなつてから歸つて去つた。帥の人品は重々しくて立派で缺點がない。彼の面白の駒など、同日の論ではない。帥は四の姫に向つて、

『もはや任地太宰府へ下るのも間も無い。支度をするのも澤山あるのに、夜が明ける
と歸り、日が暮れると來るといふ有様で怠けて了つて困る。誰もゐませんから私の宅へ
お來でなさい。それから供して行かうと思ふ女中どもを集めて早く支度をなさい。日數
はもう唯十日餘しかありません。』

といふと、

『遠い所へ親類の人など、別れてはどうして參れませう。』

と姫は答へる。

『そんなら私一人で行けといふのですか。一日二日夫婦となつたばかりで止して終はう

といふお考へですか。』

と言つて帥は笑つて居る様子は氣の置けない風であつた。帥は心中に「此女は容貌は佳いが性質はどうだらう」と未だ不十分に思つたが這廩高位の人が特別に周旋してくれたのに今日明日出立といふ時に離別する譯にも行かぬと思つて、

『心を合せて一緒に何でも支度をしませう。』

と言つて俄かに自分の屋敷へ迎へることにした。左大臣は

『これは良い響さんだ。早速奥さんを宅へ引込むな。』

と笑つて姫の送りには然るべき人々、昵懇なのを御供として添へてやつた。車を三疊立てて行つた。三條の屋敷から附けてやつた女達は

『私は彼方へ参るのは厭でういます。』

と言つたが、北の方は

『そんなこと言はないで行つておくれ。』

と強ひて遣つた。自分で添いて行くといふ譯にも行かない所だからである。

帥の屋敷に今迄奉公してゐた女どもは

『何時の間にか奥様がお代りになつた。どんなお方でせう。お子様方の爲にも困つたことです。今の羽振のよいお方の御親族ださうですから嘸勝手なことをなさるでせう。』

など、朋輩同志話合つてゐた。先妻の腹に出来た長男は何とかの權守、三男は藏人でやめて五位に叙せられてゐる。此間死んだ後妻の腹には女の子の十歳になると二歳になる男の子とがあつた。此二人の子を父の帥が常に鍾愛した。長男の權守も三男の式部の大夫も見送りをしようと朝廷には暇を乞うて皆九州へ下つた。帥は是等にいろ／＼と贈物をしよ

うと、人々の装束の料として絹二百匹、染草などを皆新妻の四の姫にあづけたので、姫はそれを並べて手のつけやうもなく困つてゐた。何とも取計らひやうも無いから母の奥方の所へかう言つてやつた。

『見送人の贈物にとて主人より絹など渡され候が、何と取計らふものにや困り居り候、

三條の屋敷より附けられ候女中どもも若き者ばかりにて相談すべきものもなく候、それにつけても母上様なつかしく、且は幼き我子も見まほしく覺え候まゝ忍びてお出かけ下され度お願ひ申上まゐらせ候。』

と言つてやつたので、奥方は息子の少將を呼んで、

『四の姫から、かういふことを言つて來た。今夜内密で行かうと思ひます。車を一寸出して下さい。』

といふと、少將

『いくら内密のお積りでも人が知らないことはありません。又堂々たる赴任の道中に連子などを伴つて行くといふのは見ともないでせう。十歳ばかりになる亡妻の子を帥は可愛がつて是非連れて行くでせうから、あの子を連れて行くには及びますまい。併し左大

臣殿の北の方に申上げて見てよからうといふ仰せだつたら連れてお行でなさい。」

といつたので、奥方は仕様がなく、

『左大臣殿のお許しがなければ親子の對面させないで行かせようといふ積りですか。』

と唯苦い顔をして

『左大臣殿の居られる間は何でも思ふやうに出来ないのですね。私は今迄人を自由にしておいた身だのに今度は人の下につく身となつたのは残念です。それに私が言ふことを賛成してくれる子供は一人もないんですもの。』

といふと少將は又例の腹立ちが始まつたなと思つて、

『どうして其處ことを仰るのですか。別に相談のし處がないから左大臣殿へと申上げたのです。斯う叱られては困ります。』

と坐を立つて去つた。奥方は左大臣家に對しては日夜感謝してゐるのであるが、腹が立つと矢張辭が出て斯う言ふのであつた。

少將は左大臣殿へ行つて北の方に母の言葉の通りには言はずに、唯母が四の姫に遣ひたがつて居るといふことを語ると、北の方

『それは御尤です。早速母上をあらへお連れ申しなさいな。』

少將、

『帥殿が来てくれとも何とも思つて居られないのに、突然押しかけて行つては都合が悪いでせう。』

『それもさうですね。それでは貴方が自分で行らして、帥殿の聞いてゐる前で、母上からのお傳言だと言つて「なつかしくてお目にかゝりたいが、一寸でもよいからお來でなさい。遠國へ旅立ちなさるのも近いうちになつたので心細く思ひます。御都合次第では此方からでも參つて、在京中にお目にかゝりたい」と言つて居られますと仰つたら、其時何とか帥がいふでせう。夫れに隨つて先方へ出掛けられるなり此方へ呼ぶなりしてお會ひなさい。あの小さいお子は姫のとは帥に知らせないやうになさい。縦令四の姫があの子をお供に連れて行かれるにしても、一人で行かれるのは心配だからと思つて母上がつけてよこされたやうにして置きなさい。』

といふと、少將は心中になか／＼推察力の優れた感心な方だ。立派な有難いお心だ。それに反して母上が無暗に腹ばかり立てられるのは、仕方のない人だと思つて、

『御尤な仰せです。そんならさう取計らひませう。』
 と言つて、帥の所へ行くのは迷惑であつたが、母上が姫を戀しがつて居られるのだらうと
 氣の毒でもあり、努めて帥の屋敷へ行つた。姫も帥と同じ所にゐた。

『一寸お話ししたいことがあります。』

といふと、帥

『此處で仰つても差支へのないことなら、早く此處へお入りになつて仰い。』

といふので少將は入つて、母が會ひたがつてゐることをいふと、女君

『本當にどうかしてお目にかゝりたう思います。私もおなつかしくて都合して參りたい
 と昨日も申上げた所です。』

といふと、帥

『貴女が彼方へ行くとも私も彼方へ行かなくてはならぬことになつて面倒で不便だから、
 甚だ失禮だが、母上に此方へ来て戴かう。他人が居るなら御遠慮もあらうが、子供はか
 りだから其處にはあるまい。併しそれでも都合が悪いなら何處か離れ座敷へでもお置
 き申さう。京都に居るのももう二三日のことだ。母子對面しないでは別れられないのは

當然だ。』

といふので、少將は豫想の通りだと思つて

『其事を母も大層喜んで居ります。』

といふと、帥

『早速、然るべく取計らつて此處へお連れ申しなさい。どう考へても其方へ伺はせる譯
 には行きませんから。』

と言ふ、少將

『それでは歸りまして其趣を傳へませう。』

と立つと、四の姫

『是非、うまくお奨めして下さい。』

『承知しました。』

と出て去つた。少將は母の所へ行つたが、腹を立て、ゐるのが恐さに左大臣の北の方と心
 配して種々相談したことを語つて、

『一寸したことですが人に勝れて出世する筈の人ですね。實にうまいことを言はれまし

た。幸福を享けるのも矢張心からですね。』

といった。奥方は四の姫の所へ行けるやうになつたのを喜んで、

『本當によく考へ付きました。三の姫も一緒にお行でなさい。今夜にでさうしようと思ひます。』

といふ。少將は

『それは餘り早すぎませう。明日位がよいでせう。』

と注意した。

夜が明けると出掛る支度をした。ちやんとした着物が無いのは可愛さうである。

『納戸に何かあるだらう。』

と奥方は言つてゐた。左大臣殿では母上が帥殿へ行かれると聞いて、着物など碌なものもあるまいと推量して、豫て美しく仕立て、置いたのを一揃、及四の姫の子の着る爲めの一着を使に持たせて、

『これはお子様にお着せなさつて下さい。旅に出では人の目に立つものですから粗末なのですがこれを差上げます。』

といつて贈つた。奥方は流石に喜ぶこと限りがなかつた。

『私は産んだ子よりも繼子からいろ／＼世話になります。私の子は七人あるけれども、是程に細かに注意してくれるものは一人もありません。帥に面會するのに第一に此子の着物の古いのを心配してゐましたのに、本當に嬉しい。』

と例よりも愉快氣に喜んだ。これは帥殿へ行くやうに左大臣の北の方が取計らつてくれたのが嬉しいのであつた。日が暮れると車二輛で出かけた。四の姫は嬉しいと思つて此間中からのことを細々語つた。女の兒は一寸の間に大層大きくなつて、立派な着物を着てゐるので側へ引き寄せて頭を撫でさすり、可愛がつてゐる。

『此兒をどうかして牽れて下らうと思つて苦心してゐます。私の子と知られるのは恥しうムいますしね』

と言ふと、奥方

『左大臣殿の北の方は汝の供人といふ體で連れて行つたらよからうと言つて居られました。よい考だと思ひます。此着物もこの子の着てゐるのも皆あのお屋敷から下さつたのですよ。』

といふと、

「こんなにいろいろ親切にして下さる人を何故昔は疎略にしたのでせう。私の身の上に就いては、親以上に心配して下さつて、殿様のお腕を一揃下さりました。召仕ひの人たちの着物、几帳屏風のやうな物から何でも皆彼方でして下さつたのです。若しさうして下さらなかつたら、此屋敷の女たちは私をどれ程に見下げるかも知れないと思ひますと御親切がつくく身にしみて嬉しうムいます。」

「私はいよ／＼繼子といふものゝ有り難いことを知りました。汝もさう思ひなさい。此處の子供を決して／＼憎みなさるな。自分の子よりも可愛がつてやりなさい。私が昔あの人を憎まなかつたら、一寸でもあんな恥はか／＼なかつたでせうに。」

「ほんとにさうでムいます。」

母子はこんな話をしてゐた。母は家内の様子を見ると、帥も重々しく立派な人なので流石に高貴な人の取計ひなさつたことは格別なものだと思つて喜んでゐる。

出立前であるから邸内はなか／＼忙しい。女中どもは日に二三人づゝ上つて来る。實に花やかな様子だ。少將は是を見るにつけても左大臣を有難く思つた。播磨守は任國に行つ

て居て今度のことを知らないから人を遣はしてこれを知らせた。

「左大臣殿の北の方、四の姫を帥殿にお世話下され候、今日廿八日に乗船の筈、御地へ到着の折は御もてなし願上候。」

と言つてやつたので守は非常に嬉しがつた。「同じ母の兄弟の私でも其麼立派な聲を妹に取つてやらうとは思はなかつたのに、左大臣殿は屹度私等を助けようと思つて神佛の生れ替つて來なかつたのであらう。」と思つた。國守は準備をして騒いで、帥の船の着くのを待ち受けた。此播磨守は母に似ない性質の善い人であつた。

左大臣邸から四の姫に附添つて來てゐた女等は今歸らうと言つたが、北の方から、

「京都にゐらつしやる間はお仕へしてゐなさい。又彼地へお供をして行かうと思ふ人はお行でなさい。」

と言つてやつたので、此帥殿もあまり勤め苦いことはないやうだが、暫時の間來てゐて様子を見るのに、矢張三條のお屋敷には兎ても及ばない。初めから此處に奉公してゐる人が一緒に付いて下るのは格別として、私どもは嫌なことです。同じ身分のお屋敷でも主人のやさしい方に奉公したいもの、まして此と彼方とは御身分が大違ひです。萬事極樂淨土のや

うな心持のするあの御殿を捨て、下るといふのは氣でも違つたものゝすることです。」と下使の者でもさう思つて一人もついて行かない。扱、帥は大人を三十人、小童四人、下使を四人と是丈の召使を連れて行くことに定めてゐた。出立の日が近くなるにつれて四の姫の兄弟姉妹等皆來集つて互に別れを惜み悲しさを述べた。多くの人が集まつて裝束花やかな有様を見ると

「左大臣様の北の方の次には此お方がお幸福しあはせでゐらつしやる。」

と女中の一人がいふと、又一人が

「これも誰がしてあげたのですか。矢張あの北の方の御幸福しあはせの御縁故でかうなのですかね。」

など、口々に評しあつてゐた。愈明後日出發だといふので、四の姫は左大臣様にお目にかからないでは出立することは出来ないと言つて同邸へ伺候した。車の數の多いのは面倒だと詫と三輛ばかりを連れて行つた。北の方が對面していろ／＼細かい話があつたが茲には書かぬ。其は讀者の推量に任せる。帥のお供として下る人には誰にでも北の方は結構な美しい扇三十本、螺をすつた櫛だの、蒔繪の箱に白粉を入れたのだを自分の屋敷の女中で帥

の女中と交際してゐた者の手から「これを記念に」と言つて分配させた。取次いだ女中等も自分等が行届いたやうに人に思はれるのを嬉しく思ひ、貰つた方でも結構だ有り難がり、互にいろ／＼打ちとけて語つて帥の邸に歸り、

「今迄此お座敷を良い所と思つてゐましたが、彼方を見ると作法から何から様子が格別に立ち勝つてゐるので、全然心うつりがして了ひました。どうかして三條のお座敷へ御奉公がしたいものです。」

と内密で互に語り合つた。

翌朝左大臣の北の方から手紙が來た。

「これからはしばらくお目にかゝれぬこと故其間の分迄もお話し申し上げんと昨夜は存じ候ひしも、いつの間にやら夜も明けはて残り惜しく候。老少不定の世の中とてお別れ致し候後如何なることあらむかと悲しく候。

はる／＼と峯の白雲立ちのきて又かへりあはんほどのはるけさ。

借、此品は御道中の御用にもと差上げ申候、」

と、蒔繪の御衣櫃一對に、片方には引出物の料としては衣服一襲に袴を添へ、まう片方に

は姫自身の装束三領に種々の織物を重ねて入れてあつた。御衣櫃の上には其櫃と同じ大きさの幣袋の中に扇を百本入れてのせてあつた。又別に小さい衣箱が一対あつた。これは姫の娘に遣つたのであらう。其片方には装束一揃、片方には手箱があつて其中には黄金の箱に白粉を入れたのと小さい櫛箱とが入れてあつた。猶委しく書くべきだが煩はしいから省く。姫の娘への手紙、

『いよ／＼今日一日にて明日は御立ちと承り候。其後は如何ばかりお慕ひ申し上げることならんと今から思はれ候。

をしめども強ひて行くだにうきものを我が心さへなどかおくれぬ。』

とあつた。帥はこれを見て、

『實に澤山下さつたものだ。這麼に迄して下さらなくてもよいのに。』

と言つた。使に來た者に引出物をした。四の姫

『何とも御返事の申上げやうもなく候。

しら雲の立つ空もなくなしくて別れ行くべき方もおぼえず

頂戴致し候品々拜見致し皆々喜び大騒ぎ致し居り候。』

と返事をした。姫の娘から返事は

『私よりこそ御近所のうちにお伺ひ申上げやうと存じ居り候にお消息給はり恐れ入りまゐらせ候。御歌のなかおくれぬとは私も同じやうに覺え候。

身を分けて君にしそふるものならば行くもとまるも思はざらまし。』

と書いた。左大臣の北の方へ四の姫から出す返事を見て、母の奥方は今更悲しくなつて非常に泣いた。奥方は特に此人を愛してゐたのである。

『私はもう七十にならうとしてゐます。後六七年は兎ても生きられますまい。死ぬ時に逢はれないのは……』

といつて泣くので、四の姫は非常に悲しくて

『それですからどうですかと前にお尋ね致しましたのです。お母様がお好きで無理に私をお遣りになるのではいりませんか。今日になつてからは止すといふ譯にもまわりませぬ。御心配遊ばしますな。決してこれ限でお目にかゝらないで終ふやうなことはいりませぬ。』

といふと奥方は

「私がきめたのではないよ。左大臣殿がなさつたのです。私を悲しい目に遣はせようと思つて根性の悪いことをなさつたのね。何だつて嬉しいなど、思つたのか知ら。」

四の姫、

「今になつては何と仰つても仕様がありません。矢張斯うして一寸でもお別れ申すといふ前世からの約束なんでしたらう。」

と慰めた。少將は

「世の中に親子の別れをするものは澤山ありますが、母様のやうなことを言つて泣くものはありませんよ。聞き苦いからお止しなさい。」

と制した。帥は左大臣殿へ暇乞ひに出かけた。大臣對面していろ／＼語つた。

「今迄とても親しく御交際しましたが、親戚の間柄となりましたからは一層御昵怨に願ひます。あの小娘と一緒に下るさうですが、可愛がつてやつて下さい。あれは故大納言が非常に愛したのですから、此處へ引き取つて養育しようかと申したのですが、彼の奥方が姫を一人でやるのを大層心配に思つて彼の少女を附き添はせたので、私も無理に留めることを出来ないのです。」

といふと帥、

「出来る丈は大事にしてやりませう。」

と答へた。夕方になつて辭して歸ると、装束一領を授け、駿馬二頭を贈つた。其他餞別の贈物細々と澤山した。

帥は歸宅して四の姫に左大臣の話したことを語つて、

「小さい娘さんといふのは幾歳になるのですか。」

と問うた、

「十一歳位でございます。」

と答へると、

「大納言は随分年老つてゐられたやうだが、怎うして其麼幼い子を持つてゐられたのだらう。」

と云つたのは可笑かつた。

「左大臣殿の女中が歸るのには何をやりましたか。」

「何もやはりは致しませぬ。相當なものがございませぬもの。」

「仕様のないことを言ふ人ですね。今迄随分永い間使つて置きながら何にもやらずに歸さうと思つてゐたのですか。」

と恥かしめるやうに言つて、心中には「此人は少し考が足りないな」と思つて、残つてゐた物を取り出して、大人三人には絹四匹、綾一匹蘇枋一斤づゝ、少女には絹三匹と蘇枋、下仕の女には絹二匹に蘇枋を添へて與へたので帥は情のある人だと人々が思つた。

扱豫定の日が來た。曉から支度をして大騒ぎであつた。奥方は泣きながら獨りで自分の家へ歸るのを悲しがつて、四の姫を握へて泣いてゐると、黄金で作つた中の見えるやうにしてある透箱を、衣箱の大きさに拵へて五色の組糸で結つてあるのを代赭色の羅の布に包んで持つて來た。

『どちらからですか。』

と取次が問ふと、

『唯、此邸様の奥様に御覽に入れる爲の品です。』

と言つて使が歸つた。其旨を傳へると不思議に思ひながら見れば、羅を海の色に染めたのを箱の底の敷物としてあつて、黄金の島臺が中に入れてある。沈といふ名木で作つた船を

浮べ島には木を澤山植ゑて濱の様子が面白い。何か書いたものでも入れてあるかと思つて見ると、白い色紙に小さく書いて船の浮いてゐる所に貼りつけてあつた。放して見ると、

『今はとて島こぎ放れ行く船にひれふるぞを見るぞかなしき』

別れの惜しさなどことごとくしく申上げては却て人聞き悪しく候間何とも申上げず候。』

と書いてあつた。面白の駒の筆蹟なので思ひがけなく喫驚した。誰がしたのだらうと母の奥方も是を見て不思議があつた。四の姫は彼の男とは深く言ひかはしもせず、普通の夫婦のやうにもしなかつたから考へ出すこともなかつたが、是を見て流石に昔のことが思ひ出された。少將は

『これを左大臣殿の姫君にお上げなさい。』

といふと、奥方は

『立派なものだ。矢張持つておいで。』

と言つたが、四の姫も左大臣に今迄萬事世話になつたことだから其お禮にと思つて、

『それがよいでせう。』

と答へた。少將は

「ともかくさうなさい。私が持つて行つて差上げよう。」

とそれを受取つた。一體面白の駒は這麼ことは思ひつかなかつたのだが、妹等が氣がきいてゐるので子供もあることだから、何にもしない譯には行かないと斯うしたのであつた。夜が更けて母の奥方は歸宅した。帥の一行は明け方の四時頃出發した。車は十餘臺であつた。朝廷から疾く赴任せよと重ねて勅が下つたので、山崎にも滞在しないで其儘急いで下つた。送りの人々にも皆引出物をして此處から歸した。三條邸から遣つてあつた女等は皆歸邸して此間中からの話を細かにして、母の奥方が「私がしたことぢやない」と言つた事を語ると大臣夫婦は笑ひ轉じた。母の奥方は見苦しい程四の姫を戀ひしがつて泣いたが日數が經つと忘れて了つた。播磨守は帥を彼地で待ち受けて盛に歡待したが、是は茲には記さぬ。左大臣は

「二人は之で形がついた。もう一人を何とかしてやらう。」
と言つてゐた。

斯うして年月が經つうちに目出たいことが澤山起つて來た。帥は無事に到着して彼地から左大臣に多くの品々を獻上した。左大臣の長男は十四で元服し、姫君は十三で裳を着せ

ていづれも大人になつた。太政大臣は次男をも敗けないやうにと思つて元服させたので、父の左大臣は

「あんなに競争なさるおつもりだ。」

といつて笑つた。年も明けたら姫君を入内させようといふので非常に大切にかしづいてゐるうちに何時の間にか年も改まつた。二月に入内した。書かないでも其儀式の盛大なことは讀者が推量し得るであらう。姫君は實に美しいお方なので御寵愛があつたのに、其上叔母にあたる皇太后の宮が可愛がつて下さるので、前から仕へてゐる人々よりも格別に全盛を極めた。播磨守は辨になつた。あの衛門の夫の三河守は左少將兼辨となつたので、妻は辨の北の方と言はれて澤山子をもつて堂々と三條邸に出入してゐた。斯うしてゐる内に太政大臣は病氣になつて官を辭したが、陛下はそれを一向お聞き入れなかつたので、

「大曆年を老りましたが、朝廷に出仕致しませんでは氣が、りてゐますので今迄押し御奉公致して居りましたのでゐます。今年は私の慎しむべき年でゐますから、引籠りませうと思ひますのに、此職に就いて居りながら朝廷の尊い御政事に參りませんでは不都合でゐませう。私が辭します代に左大臣を太政大臣になさつて下さいませう。學

問も相當にある男でゐますから此爺ぢいよりもお世話は却てよく出来ますでゐませう。」
と自分の御娘の皇太后の宮からも頻りに申上げて頂いたので、天子様は

『そんなら差支へはない。生きてさへゐてくれ、ば嬉しいのだ。』

と左大臣を太政大臣にした。世の中の人

『まだ四十歳にもならないで、最上の位を極めなされた。』

と驚いて噂をした。

左大臣の御女の女御は中宮となつた。弟の少將を中將にして中宮の亮すけを兼任させた。兵衛佐等も皆昇進した。長男の兵衛の佐は左近衛の少將になつた。で祖父殿は

『弟太郎の兵衛の佐を後廻しにして。』

と不足を言つたが、

『それは御無理です。私の子供ばかりを私が太政大臣になつた手初めにどうして昇進させられませう。』

といふと、

『あれは汝おまへの子ではない。此爺ぢいの五男だから何で世間の人が悪口するものか。前に汝おまへ

長男が左近の少將になつたから此度はあれを右近の少將にしてくれ。叔父でありながら甥なまこに負けるといふことがあるものか。』

といつて、

『よし、不承知と見える。』

と言つて参内し、切に奏上して右近少將に任じた。

『これでよい。此子が早く生れたら、これに私の官職を譲る筈だつたのに。』

と言つた。非常な可愛がり方である。

大臣殿の北の方の幸福を世間の人が、

『結構なお方だなど、言ふのは古めかしい言葉だ。落窪に入れられて單衣の袴を着てゐられた頃には這様に太政大臣の北の方、中宮の母上とならうとは思はれなかつた。』

と昔の事を知つてゐる者は内密ないしやくで噂をした。故大納言の三の姫を中宮の最高の女官、御み匣殿くしひどのにして上げた。帥の任が終つて無事に四の姫が歸京したのを、母の奥方は嬉しいと思つたのは當然のことである。斯様の人々が榮えるのを十分に見よと神佛も思召したのか、母の奥方は壽命が永くて七十餘迄存命してゐた。大臣殿の北の方は

「お母様も大分お年を召したやうでムいます。佛様の功德におすがりなさいまし。」
と奨めて尼にして立派に暮させたので、母上は喜んで日を送った。

「世の中の人は繼子を悪むものではありません。繼子といふものは本當によいもので
す。」

と言つた。それでも腹が立つた時は

「私は魚が好きなのに、私を尼にして食べられないやうにして丁ひました。腹を痛めな
い子は這麼に根性が悪い。」

と言つてゐた。死んだ後も此大臣殿が葬式の事など嚴かに取り行つた。衛門は中宮の内侍
になつた。

長男次男の少將達は一緒に昇進して行つた。祖父殿が薨せられたが、臨終の時に

「私を大事と思ふなら次男を長男に負けさせるな。」

と返す／＼遺言して置いたので、氣にかゝつて次男を大事にした。二人は左大將右大將と
引續いて昇進した。母北の方昔の落窪の君の幸福は言はずとも知れたことである。帥は太
政大臣のお蔭で大納言になつた。面白の駒は病氣が重くて坊主になつたから其後の消息は

更に見えない。あの典樂の助は蹴られたのが原因で病氣になつて死んで了つた。これを聞
いて、

「此人が這麼に幸福にしてゐるのを見ないで死んで了つたのは残念なことをした。何だ
つて甚く蹴らせたのだつたらう。もう暫時生かして置く筈だつたのに。」

と大臣は言つた。昔、いろ／＼親切にしてくれた衛門の叔母さんの夫の和泉守は中宮職の
役人に任せられて幸を享けてゐる。昔の阿漕は今典侍に出身してゐる。此典侍は二百
歳の長壽を保つたといふことである。

口譯落窪物語終

三〇

附 錄

落窪物語人物一覽

今上天皇 (三の卷にて東宮に御讓位)

- 第一皇子 (御母は左大將の長女、三の卷にて御即位)
- 第二皇子 (御母は左大將の長女、三の卷にて立太子)
- 第一皇女 (御母は左大將の長女、二の卷に御歳十二と見ゆ)

左大將 (左大臣となり太政大臣に至る、四の卷にて致仕)

長男 (一の卷にて左近少將、二の卷、中將、中納言兼衛門督、三の卷
 大納言兼大將、後大納言を男にゆづる、四の卷左大臣、太政大臣
 に至る。原書に道頼と名出つ)

次男—(侍従より少將、宰相中將となる)
三男—(童殿上より、兵衛督となる)
長女—(今上天皇の中宮。東宮、第二皇子、第一皇女の御母)
次女—(藏人少將の妻となる)

二

長男—(母は落窪の君、二の巻にて生る、四の巻十歳にて童殿上、十五にて元服、左兵衛佐、左少將左大將に累進)
次男—(母は落窪の君、弟太郎と呼ぶ、九歳童殿上、十四歳元服、右兵衛佐、右少將、右大將に累進)
長女—(次男の妹、四の巻にて女御更の中宮)
三男—(四の巻に四歳とあり)
次女—(四の巻に六歳と見ゆ)

左大將の北の方—(左近少將以下の母)

源中納言—(四の巻にて大納言、薨、名は忠頼)

長男—(越前守、大納言道頼の家扶、播摩守、辨に至る、名は景純)
次男—(法師)
三男—(元服後、大夫、左衛門佐、少將、中將、中宮亮となる、名は景政)
長女
次女—(右中辨の妻)
三女—(藏人少將の妻なりしが縁絶えて後、御匣殿となる)
四女—(面白の駒の妻となる。一女あり、後、帥中納言に嫁ぐ、一男一女あり)
落窪の君—(母は某親王の王女、左近少將道頼に愛せられて二條邸に住み其正妻たり、本編の主人公)

源中納言北の方—(三男四女を産む、落窪の君を苦しむ。後、尼となり七十餘にて死す)

三

典葉の助（源中納言の北の方の伯父、落窪を苦しめたる翁にて賀茂祭の時打たれ遂に死す）

右中 辨（源中納言の次女の夫、美濃守となる）

藏人少將（源中納言の三女の夫なしが後、左大將の次女の夫となる宰相、中將、中納言）

帥中納言（源中納言の四女の夫、帥より大納言となる）

治部 郷（大將の北の方の叔父）

兵部少輔（面白の駒と言はる、源中納言の四女と婚す。一女あり）

左少將の乳母（帯刀の母）

帯刀（阿漕を妻とす、左衛門尉藏人、三河守、左少辨となる、名は惟成と原書に見ゆ）

阿漕（落窪の君の後見、帯刀の妻となる、二條殿にて衛門と名を改む、掌侍

を経て典侍に至る）

和泉守（阿漕の叔母の夫、中宮の家司となる）

和泉守妻（阿漕の叔母）

少納言（始め源中納言家に仕へしが後二條邸に仕へ乳母となる）

辨の君（少納言を二條邸に導きし人）

侍従の君（源中納言家に仕へし女、越前守と通ず、後二條邸に仕ふ）

典侍の君（源中納言家の女中、後二條邸に仕ふ）

大 夫（右に同じ）

ま ろ や（右に同じ）

兵 庫（和泉守の従姉妹、二條邸に仕ふ）

源中納言の四女の乳母（左近少將と四の姫とを婚せしめんとす）

少 將（少納言の従姉妹、辨少將方の女中）

宮の典侍—(中納言の八講に后の宮より御使として来る)
 某—(大將家に仕へし人、左少將と源中納言の四の姫とを婚せしめんと取次ぎし人)
 右大 臣—(一人の女を中將の妻となさんとす)
 辨少 將—(交野少將と言はれし人)
 右馬 允—(少將によりて任官したる田舎の人)

著 作 權 所 有

大正元年十月一日印刷
 大正元年十月九日發行

(日譯落窪物語)
 (定價金八拾五錢)

著 者	鴻 巢 盛 廣	發行者	大橋新太郎
印刷者	水 谷 景 長	印刷所	博文館印刷所
發行所	博文館		

東京市日本橋區本町三丁目
 東京市小石川區久堅町百〇八番地
 東京市日本橋區本町三丁目八番地
 東京市小石川區久堅町百〇八番地
 東京市日本橋區本町三丁目
 東京市小石川區久堅町百〇八番地

文學博士幸田露伴先生塚原滋柿先生
饗庭篁村先生

校藤島武二畫伯裝幀
訂橋口五葉畫伯裝幀

空押及色刷模樣
天金線製木版現麗

文藝叢書

二十第刊
冊一期行

▲第一卷、第二卷既刊▼
菊判紙總布上製每巻挿畫數十個
紙數約壹萬頁
正價一冊壹圓 特價十二冊拾圓
小包料一冊拾貳錢

第一卷 忠臣藏文庫

第五卷 俠客全傳

第九卷 南里見八犬傳

第二卷 椿説弓張月

第六卷 演劇脚本集

第十卷 南里見八犬傳

第三卷 西鶴文集

第七卷 忠義復讐傳

第十一卷 世話淨瑠璃名作集

第四卷 中膝栗毛全集

第八卷 南里見八犬傳

第十二卷 紀行文編

文藝の人に於ける、其の性情を薫染し、其の氣習を陶鑄す、功もとより少にあらす。目するに閑を消し心を娛ましむるの書を以てして而して之を輕んず可からざる也。聖代泰平、文運隆昌、水滸今茲文藝叢書第一期出版に着手す。外観はたゞ賞を士女に求むるが如しと雖も、微意いさゝか補を風教に添へんと欲するなり。是に於て、鑑裁を諸先生に仰ぎ、近古文藝の中に就き、精を取り粗を舍き、趣多くして弊少きものを選り。校訂は嚴密を期して、魯魚の符無きを必し、用紙は佳良を極め、破損の虞に遠ざからんとす。印刷の鮮明より裝釘の緻密に至るまで、皆一心を用意を致し、實質の美をして廣く流布の諸本に超えしめんと欲す而して其價を低くして江湖の購得に傾にするもの、また佳書の廣布を望むの意に出でずんばあらず。

文學博士本居豐顯先生
文學博士井上頼因先生
文學博士萩野由之先生

文學博士關根正直先生校訂
池邊義象先生註解

藤島武二畫伯裝幀
橋口五葉畫伯裝幀

校國文叢書

二十第刊
冊一期行

▲源氏物語上下巻既刊▼
菊判紙總布上製紙數約壹萬頁
正價一冊壹圓 特價十二冊拾圓
小包料一冊拾貳錢

源氏物語 附 蓬草 上卷

源平盛衰記 下卷

竹取物語 伊勢物語 徒然草

源氏物語 附 紫家七論 下卷

水鏡 今鏡 大鏡

枕草子 徒然草

曾我物語 下卷

平家物語 保元物語 承久物語

紫式部日記 月のゆくへ

源平盛衰記 下卷

榮化物語

池の藻屑 松蔭日記

一國の富強、文明は國民の自信力に原因す。自信力は己を知りて彼を知るに起る。己を知るは我が歴史に通曉するに在り。我が文學を精究するに在り。此の如くにして初めて我が國情明かになり、その長所は歴史を通じて以て學問の泰斗諸博士と謀り往年の「日本文學全書」を更に擴張し、更に精選したる「校註國文叢書」を出版し

(博文館發行)

諸名家校訂

帝國文庫

全五十冊

四六判洋布背皮
金文字入類美木
紙數各冊千頁以上

正價各金七拾五錢
小包料各金拾貳錢

●諸名家珍藏の原本無量數萬卷●全部紙數五萬餘頁

(全部書名)

第一編●真書太閤記(壹卷)	第二十六編●滑稽名作集(上卷)
第二編●真書太閤記(貳卷)	第二十七編●其積自笑傑作集(上卷)
第三編●真書太閤記(參卷)	第二十八編●其積自笑傑作集(下卷)
第四編●真書太閤記(四卷)	第二十九編●人情本傑作集(上卷)
第五編●源平盛衰記	第三十編●氣質全集
第六編●南總里見八犬傳(上卷)	第三十一編●珍本全集(上卷)
第七編●南總里見八犬傳(中卷)	第三十二編●珍本全集(中卷)
第八編●南總里見八犬傳(下卷)	第三十三編●珍本全集(下卷)
第九編●東海道奧羽木曾江ノ島道中膝栗毛	第三十四編●人情本傑作集(下卷)
第十編●梅曆泰告鳥	第三十五編●赤穂復讐全集

第十一編●通俗三國志(上卷)	第三十六編●水滸傳(上卷)
第十二編●通俗三國志(下卷)	第三十七編●水滸傳(下卷)
第十三編●三馬傑作集	第三十八編●忠臣藏淨瑠璃集(上卷)
第十四編●柳澤越後黑田加賀伊達騒動實記	第三十九編●四大奇書(上卷)
第十五編●京傳全集	第四十編●近松時代淨瑠璃
第十六編●種彦傑作集	第四十一編●四大奇書(下卷)
第十七編●星月夜鎌倉顯晦錄北條九代記	第四十二編●近松世話淨瑠璃
第十八編●通俗十二朝軍談 通俗明清軍談	第四十三編●大岡政談
第十九編●甲越軍記	第四十四編●佛教各宗高僧實傳
第二十編●通俗吳越軍記 通俗漢楚軍談	第四十五編●仇討小說集
第二十一編●楠廷尉秘鑑	第四十六編●馬琴傑作集
第二十二編●風來山人傑作集	第四十七編●淨瑠璃名作集
第二十三編●西鶴全集(上)	第四十八編●俠客傳
第二十四編●西鶴全集(下)	第四十九編●續仇討小說集
第二十五編●滑稽名作集(上卷)	第五十編●近松世話淨瑠璃

(以上全部)

(博文館發行)

諸名家校訂
續帝國文庫

全部五十冊

四六判洋布書皮
金文字入類美木
紙數各冊千頁以上
正價各金七拾五錢
小包料各金拾貳錢

●諸名家珍蔵の原本無量數萬巻●全部紙數五萬餘頁

(全部書名)

第一編●眞田三代記 <small>附日本武士鑑</small>	第二十六編●傾城水滸傳
第二編●近世說美少年錄	第二十七編●文耕堂淨瑠璃集
第三編●日本歌謠類聚 <small>(上卷)</small>	第二十八編●白縫譚 <small>(上卷)</small>
第四編●日本歌謠類聚 <small>(下卷)</small>	第二十九編●白縫譚 <small>(下卷)</small>
第五編●諺紫田舍源氏	第三十編●北雪時代鏡
第六編●竹田出雲淨瑠璃集	第三十一編●常山紀談
第七編●朝夷巡島記	第三十二編●萬物滑稽合戰記
第八編●自雷也豪傑譚	第三十三編●續一九全集
第九編●江戸作者淨瑠璃集	第三十四編●續黃表紙百種
第十編●約々太平記 <small>附前太平記</small>	第三十五編●校併優全集

第十一編●太平記 <small>附北條五代記</small>	第三十六編●校併幽大
第十二編●後太平記 <small>附北條五代記</small>	第三十七編●續々紀行文集
第十三編●續近松淨瑠璃集	第三十八編●續馬琴傑作集
第十四編●近松半二淨瑠璃集	第三十九編●脚本傑作集 <small>(下卷)</small>
第十五編●後太平記 <small>附北條五代記</small>	第四十編●續京傳三馬傑作集
第十六編●脚本傑作集 <small>(上)發賣禁止</small>	第四十一編●釋迦八相倭文庫 <small>(上卷)</small>
第十七編●京山全集	第四十二編●釋迦八相倭文庫 <small>(下卷)</small>
第十八編●落語全集	第四十三編●種彦短篇傑作集
第十九編●並木宗輔淨瑠璃集	第四十四編●俊傑神稻水滸傳 <small>(上卷)</small>
第二十編●紀行文集	第四十五編●俊傑神稻水滸傳 <small>(中卷)</small>
第二十一編●一九全集	第四十六編●俊傑神稻水滸傳 <small>(下卷)</small>
第二十二編●漂流奇談全集	第四十七編●近奇談全集
第二十三編●邯鄲諸國物語 <small>附續種彦傑作集</small>	第四十八編●訂名家短篇傑作集
第二十四編●續紀行文集	第四十九編●佛敎各宗續高僧實傳
第二十五編●續水滸傳	第五十編●名家漫筆集

(以上全部)

武田壽君著並畫

●博文館發行●

繪ものがたり
淨瑠璃の女

全一冊四六判洋装南京綴
紙數二百二十頁
正價金七拾錢 郵税六錢

表紙—疲れたる色(水彩畫木版)

口繪—暗愁(三色版)

さし繪—(色刷二十圖)

組込—(四十六圖)

●淨瑠璃の女は情操生活をして來た鐵火の如き熱情と清水の如き可憐さが、戀となり詩となり物語となり、やがて徳川文學の粹となつて世間の耳目に深く刻まれた●其處を捕へたのが此本である、目覺めるばかりの繪數十葉の美しさと新味と、知らず識らず、込まれて行く文章の麗麗さと、眞味とは、相俟つて人生の活畫を開いて居る●純潔な人間の本性と、涙のにぢむ程シツト考へ込むた哀愁の深ひと、そして元祿女の恣な美しい振舞ひとは、若き人にも中年の人にも多大の興味と肯定を誘ふに足るであらう●麗はしき國情に棲める人々よ、さらば何よりも先づ此美本を購ひ給へ

終